# 平成29年度神戸短歌祭（於)県民会館パルテホール

## 総会・講演「現代短歌と古典」

会報

第197号

題字出口草露
発行者　〒679-5322佐用郡佐用町上石井685　安藤直彦方
兵庫県歌人クラブ
会計　〒657-0043神戸市灘区大石東町4-3-1-305　福島妙子
振替　01110-5-6903
印刷所　㈱甲南堂印刷

兵庫短歌賞　藤本朋世さん
新人賞　鈴木美樹さん
奨励賞　上篠かけるさん
鈴木裕子さん
遠藤和子さん
菅原艶子さん

左から岩尾、小林、尾崎氏と講師の櫟原氏

平成29年度神戸短歌祭は4月29日（祝日）午後1時より県民会館パルテホールにて開催。兵庫短歌賞・新人賞・奨励賞の表彰式と総会の後、「現代短歌と古典」と題して櫟原聰（いちはら さとし）氏による講演が行われた。

総合司会は森垣岳、宮城十子両氏。安藤直彦代表の開会の挨拶に続き表彰式。兵庫短歌賞は「冬日向」の藤本朋世氏、新人賞は「就活」の鈴木美樹氏、「ハロー、アンダーピッパラ」の上篠かける氏、奨励賞は「手をつなぐ母」の鈴木裕子氏、「動物ビスケ」の遠藤和子氏、「冬の虹」の菅原艶子氏の三者が選ばれ、安藤代表より賞状が授与された。受賞者各氏の慶びの言葉の後、選考委員を代表して三津野幸代氏より43編の応募作品に対し、公明正大な審議がなされたと報告があった。

次に、議長に新屋修一氏を選出し、兵庫県歌人クラブ平成29年度総会が開催される。先ず安藤代表より28年度の事業報告、続いて福島妙子氏による会計報告と兼貞靖行氏による会計監査報告があり、全てが承認された。今年度は役員交代年に当たり、代表兼事務局長安藤直彦、副代表生田よしえ、小林幹也、事務局次長三津野幸代、会計福島妙子、会計監査兼貞靖行、会報委員長森嶋郁子各氏が承認される。安藤代表は就任挨拶に続き29年度の事業計画として、好評を得た歌集批評会の継続など概ね従来の計画を充実させたいと述べられた。

総合司会の宮城氏（左）と森垣氏

休憩後、櫟原聰氏による講演会では、現代短歌と古典に通底する心情、姿勢、意識等具体歌をもって言及され、古典といかに繋がってゆくかを問われた。（詳しい講演内容は6～9ページに）講演後、尾崎まゆみ氏の司会により質疑応答。岩尾淳子、小林幹也両氏が「文語でどこまで表現しきれるか」等尋ねられた。

生田よしえ副代表の閉会の辞により午後4時半散会。参加者70余名。（山中洋子）

## 創立60周年記念祝賀会

兵庫県歌人クラブ創立60周年記念祝賀会は1月15日正午よりポートピアホテルにて開催された。数年ぶりの厳しい寒波到来に、参加予定者99名のうち、積雪の中難儀しての出席者も含め86名が参会された。会に先立ち阪神大震災等災害の犠牲者および当クラブの物故者に哀悼の黙祷がささげられた。兼貞靖行、黒崎由起子両氏の司会のもと開会。

先ず安藤代表より60年の歩みを辿り開会の挨拶。続いて主賓の井戸敏三兵庫県知事より一首を詠みこまれての祝辞とともに、県歌人クラブに表彰状が授与された。

卒寿の土居正氏による乾杯の後、来賓各氏より祝辞をいただき、当クラブに長きに渡り尽力された方々に感謝状、功労賞が授与され、代表として楠田立身氏が挨拶された。

（詳しい内容は2ページに）

次いで帯刀清彦氏による「高砂」の朗詠をいただき、招待各団体代表より今後の当クラブへの期待が語られ、続いて当クラブに協力されてきた会員の代表より今後への熱い抱負が語られた。また、この秋ふれあいの祭典を担当される淡路市の清水昭男氏が多くの方の参加を促された。

本会実行委員長中川昭氏の閉会の辞により、午後3時盛会裡に散会。（山中洋子）

# 思いをつなぎよりよき明日へ
## 創立60周年記念祝賀会開催

兵庫県歌人クラブ創立60周年祝賀会は平成29年1月15日正午から、神戸ポートピアホテルにおいて開催された。開会に先立ち会員の物故者ならびに熊本地震、阪神・淡路大震災の犠牲者に追悼の黙禱を捧げた。開会の挨拶は安藤直彦歌人クラブ代表。兵庫県、神戸市の行政、文化団体、会員への謝辞を、また歴史は人でありこの流れをよりよきものとし次の世代につなげたいと述べられた。続いて来賓の井戸敏三兵庫県知事より、言葉を芸術の域に高め、文化の道を歩まれていることに敬意を表し、60年を迎え、原点に還り創立当時の思いをもう一度引き継いで新しい歩みを続けられますようにと祝辞があり「短歌だから生活や自然を活写せん言葉の持ちたる強さなるべし」と、自作の祝いの歌をご披露下さった。引き続き井戸知事より、歌人クラブが県民文化の向上に尽くした功績により安藤代表に表彰状が授与された。ここで、土居正氏の乾杯の発声で祝賀の宴へ。岡本康憲神戸市市民参画推進局文化交流部長から久元喜造市長の「今年開港150年を迎える神戸、芸術文化の交流を通して文化都市神戸の魅力を共に発信していきましょう」とのメッセージが披露された。山本亮三兵庫県芸術文化協会理事長からは、文化は人々の心の復興に大きな役割を果たす力がある。西年の今、今後をめざし羽ばたく年となられますようにと祝辞を頂いた。

祝辞を述べる井戸知事

続いて長年歌人クラブにご尽力下さった方々が安藤代表から表彰された。楠田立身氏には感謝状、土居正氏には表彰状、野瀬昭二氏、藤井幸子氏には功労賞が授与された。感謝状・石橋妙子氏、表彰状・小畑庸子氏、功労賞・伊藤佐重子、尾上田鶴子、田中義昭、松尾鹿次各氏は欠席された。なお功労賞受賞の上田一成氏は1月11日ご逝去された。心からお悔やみ申し上げる。表彰者を代表し楠田立身氏より、わが人生は兵庫県歌人クラブとともにあった、命の続く限りお手伝いをしたいとの言葉があった。会も闌のころ観世流、帯刀清彦氏が謡曲「高砂」を謡われ会場が雅な雰囲気に満たされた。

左から楠田氏、土居氏、野瀬氏、藤井氏

加藤隆久生田神社名誉宮司からは「歌人が集ひてつくりし良きクラブ六十年を偲びことほぐ」との祝いの歌をいただいた。鈴木漠半どんの会代表は、創立時歌人クラブに2～3年所属しており年刊歌集には3号くらいまで鈴木の歌がある、60年とお聞きして自分を振り返る良い機会になったと語られた。澤井洋子兵庫県俳句協会会長からは、一茶の句をふまえ「雪溶けて歌人達と仲良くす」の即吟を頂いた。坂本竜之介神戸新聞社文化部長より歌人クラブとは結成総会よりご縁が深い、今後の活動がますます盛んにとの祝辞があった。その後、いりの舎の玉城入野氏、神戸新聞社の平松正子氏、小林幹也副代表、浮田伸子氏、尾崎まゆみ氏などベテラン・若手会員からも活発な発言が続いた。また淡路歌人クラブの清水昭男氏は、この秋淡路市にて開催されるふれあいの祭典兵庫短歌祭を淡路の起爆剤にしたいと話された。コスモス短歌会のテーブルからは「早春賦」の歌声が流れた。閉会の辞として中川昭60周年記念実行委員長より来賓・会員諸氏への謝辞があった。司会は兼貞靖行、黒崎由起子が務めた。なお来賓の方々よりはお祝いを、田岡弘子氏からは祝電、短歌研究社、いりの舎からはスタンド花をいただいた。出席者は86名。

（黒崎由起子）

☆**出席者**☆井戸敏三兵庫県知事、仲居敬司兵庫県企画県民部芸術文化課長、岡本康憲神戸市市民参画推進局文化交流部長、山本亮三兵庫県芸術文化協会理事長、加藤隆久神戸芸術文化会議議長、鈴木漠半どんの会代表、澤井洋子兵庫県俳句協会会長、坂本竜之介神戸新聞社文化部長、楠田立身、土居正、野瀬昭二、藤井幸子、有本保文、安藤直彦、生田よしえ、池本登代子、石原智秋、一海美根、伊藤敦子、伊藤絹子、伊藤典子、井上玲子、浮田伸子、大久保富美子、大西よし子、尾崎まゆみ、桂日呂志、桂茂子、加藤直美、兼貞靖行、岸野和夫、楠田智佐美、栗屋喜代美、黒崎由起子、後藤與子、後藤早苗、小林幹也、小松カヅ子、榊真由美、清水昭男、清水誠朗、赤藤琢哉、赤藤緑、帯刀清彦、田口幸子、玉城入野、長井淑子、長岡一美、中川昭、中道君子、中村美也子、西橋美保、平松正子、廣庭由利子、福島妙子、藤岡成子、藤本潮子、藤本朋世、藤本美智子、藤本則子、船橋貞子、前田昭子、牧野秀子、真砂晃美、増井定子、益永典子、松田辰子、三木雅子、水田三和子、三津野幸代、宮本喜久子、宮城十子、三宅隆子、森嶋郁子、楊井佳代子、安田千富美、安田玲子、矢内温代、矢野一代、山口旭、山田文、山中洋子、山本みさよ、吉田千代美、吉野節子、渡辺春美

（会員敬称略）

# 兵庫県歌人クラブ
# 60年の足跡

兵庫県歌人クラブは昭和32年3月21日、神戸新聞会館7Fホールにて結成総会を開催しその第一歩を踏み出した。代表は仲郷三郎、幹事に磯江朝子、阪口保、頴田島一二郎、飛松實、冬木三左、木村栄次、山本武雄、初井しづ枝、岡田眞、倉地与年子、藤田恒男、木村眞康、平井三恭ら県下及び歌壇で活躍中の40人を選出し、同日第一回短歌文芸祭春季短歌祭を開催。祝辞は阪本勝知事、朝倉斯道神戸新聞社社長。講演は作家白川渥「短歌の抒情性」、阪口保「兵庫県の風土と文学」、頴田島一二郎「現代短歌の難解性」。

以後、昭和63年4月まで春季短歌祭として開催し平成元年4月からは神戸市制100周年を記念して神戸短歌祭と改称、現在に至る。平成22年からは公募短歌祭という形ではなくシンポジウムや歌合わせを開催し本年で29回を迎える。これまでに招聘した主な講師は阪本勝、早川幾忠、陳舜臣、田辺聖子、津高和一、高安國世、石田比呂志、玉城徹、吉川宏志、小黒世茂、鈴木漠、山崎整、中西勝、加藤隆久、香川ヒサ、阿木津英、及川隆彦。

また秋の短歌祭は昭和32年から同46年まで開催。昭和47年からは県と兵庫で兵庫県芸術文化祭県民短歌大会として同63年まで行い、平成元年から兵庫のまつりふれあいの祭典兵庫短歌祭として県下各地持ち回りで開催し今年は淡路市で開催される。秋の短歌祭の主な講師は竹中郁、前川佐美雄、小松益喜、宮崎修二朗、前田透、加藤将之、寿岳文章、上田三四二、安田章生、田井安曇、小池光、伊藤一彦、三枝昂之、大鐘稔彦、松田和薫。昭和63年10月29日国民文化祭ひょうご88文芸短歌部門には松本清張が講演。

シンポジウムや歌合せは昭和43年以来、今日的課題を俎上に適宜開催している。これまで登場したパネラーは八谷正、田中義昭、西藤優、藤本啓、上野晴夫、水野美子、上田一成、川口汐子、浜　守、山村明寛、落合けい子、中野昭子、吉岡生夫、松尾鹿次、笹原涼、たなかみち、蔵本瑞恵、沢田英史、江戸雪、安藤直彦、林和清、小林久美子、高瀬隆和、田岡弘子、田中教子、大辻隆弘、島田幸典、小谷博泰、浮田伸子、秋本多恵、足立晶子、桂保子、中島眞喜子、藤岡成子、飯田進、楠誓英、來田康男、武富純一、藤本朋世、森垣岳、佐藤博之、廣庭由利子、宮城十子など。

新人賞は昭和34年より公募、推薦により選出し、平成25年よりは兵庫短歌賞を設けている。

『年刊歌集』は昭和34年より毎年刊行し現在第56集を数える。第45集より井戸敏三現知事も寄稿されている。

なお昭和36年短歌研究会「水曜会」を発足、毎月例会をもつ。平成2年384回をもって終了した。

会報は昭和32年の発足当初より平成16年までは年5～3回、平成17年より2回発行。昭和62年には発足30周年を記念して「縮刷版」を刊行、平成28年12月現在196号発行されている。

平成19年より毎年3月県公館で開催される「伝統文化体験フェスティバル」に参加、ブース展示と体験コーナーを担当している。講師は安藤直彦、中川昭、沢田英史、生田よしえ、桂保子、伊藤佐重子、楠誓英、内海永子、武富純一など。

平成25年より歌集批評会を開催、会員出版の二冊の歌集を2名のレポーターが批評し研鑽の場となっている。年に2～3回開催し現在8回と回を重ねている。

昭和52年1月15日新年宴会（六甲荘にて）
前列左から飛松實、木村栄次、細田直俊、磯江朝子、北村青吉、星野京、阪口保の各氏

平成26年7月16日神戸文化ホールにて神戸市短歌大会開催（NHK学園、神戸市主催）。講演は佐佐木幸綱「阪神大震災から20年」、選者は大塚寅彦、栗木京子、佐佐木幸綱、穂村弘、安森敏隆。当日詠選者は安藤直彦、黒崎由起子。

そのほか会員の親睦を図り新年懇親会を毎年1月15日に開催している。

これまでの記念行事は兵庫県歌人クラブ創立30周年記念として昭和62年5月31日県中央労働センターにて講演会を開催、山崎馨による「風月同天」。創立40周年記念行事及び兵庫県文化賞受賞記念会はグリーンヒルホテル神戸にて平成10年12月14日（日）講演会を開催、中西進による「和歌の力」。創立50周年記念は第1部として平成19年1月15日東急インにて祝賀パーティー、第2部は2月25日県民会館にてシンポジウム「成熟社会における可能性としての短歌」を開催。

歴代の代表は初代・仲郷三郎、二代・阪口保、三代・木村栄治、四代・米口實、五代・石橋妙子、六代・笹原涼、七代・楠田立身、八代・吉岡生夫、九代・安藤直彦。

会員数1369人（平成元年）～560人（平成28年）。年会費は千円、平成27年より二千円となっている。

なお平成7年の阪神・淡路大震災では会員の多くが罹災、居住移転に伴う居場所の確認などは当時の事務局が担当した。

（黒崎由起子）

# 平成19年から28年の稔り

## ～神戸短歌祭・ふれあいの祭典兵庫短歌祭・兵庫短歌賞・新人賞・歌集批評会～

**▽神戸短歌祭**

第19回　平成19・4・29
県民会館パルテホール
知事賞　澤田進京
白き息をはげしく揺らしカップルの手話はとぎれず朝のベンチに
講演「玩具に添えて」　中西　勝

第20回　平成20・4・29
県民会館パルテホール
知事賞　小野みゆき
五センチだけ高い世界を見るために老いたるわれもパンプスを履く
講演「短歌のことば」　安田純生

第21回　平成21・4・29
県民会館パルテホール
知事賞　谷池宏美
少年の心が捨ててあるようなゴミステーションの昆虫図鑑
講演「『蒼氓』と激変化の神戸」　山崎　整

第22回　平成22・4・29
県民会館パルテホール
シンポジウム開催
「伝統文化の継承と変革―明日の短歌・私の作歌方法」
飯田進、江戸雪、小林幹也、沢田英史、中川昭

第23回　平成23・4・29
県民会館パルテホール
シンポジウム開催
「歌の翼に乗って～短歌の昨日・今日・明日」
安藤直彦、浮田伸子、楠誓英、田岡弘子、濱守、矢野一代、山科真白

第24回　平成24・4・29
県民会館パルテホール
シンポジウム開催
「―短歌の中のわれと短歌を作るわれについて―」
生田よしえ、石原安藝子、大畠良樹、小谷博泰、西橋美保、藤岡成子、三津野幸代

第25回　平成25・4・29
県民会館パルテホール
シンポジウム開催
「短歌の魅力。あるいは、私の好きな歌」
尾崎まゆみ、來田康男、佐藤博之、竹村公作、中島眞喜子、藤井幸子、益永典子

第26回　平成26・4・29
県民会館パルテホール
「歌合わせ」開催
大辻隆弘、岩尾淳子、尾崎まゆみ、小畑庸子、上條翔太、楠誓英、小林幹也、田中幹、廣庭田利子、田岡弘子、武富純一、南輝子、渡邉大貴、（朗詠　山田麦）

第27回　平成27・4・29
県民会館パルテホール
鼎談「短歌にとって『美』とは何か　阿木津英氏を囲んで」
阿木津英、安藤直彦、江畑實、中川昭

第28回　平成28・4・29
県民会館パルテホール
講演「私（編集者）から見た今日の歌」及川隆彦

**▽ふれあいの祭典兵庫短歌祭**

第19回　平成19・10・21
赤穂市文化会館
文部科学大臣賞　岡田笑子
来客のありて着けたる補聴器に自が足音を拾いつつ出る
ジュニアの部
知事賞　宮　架蓮
講演「赤穂義士の和歌をめぐって」　木山正規

第20回　平成20・11・9
尼崎市労働福祉会館
文部科学大臣賞　下村千里
通行人Aのやうなる振りをして野良猫がまた雨の庭ゆく
ジュニアの部
知事賞　高橋桃子
講演「まちづくりはおもしろい」　伴　一郎

第21回　平成21・11・14
県民会館パルテホール
文部科学大臣賞　上月しげ子
十枚の田を植ゑ終へて土の香のいよよ濃くなる私のからだ
ジュニアの部
知事賞　林田涼那
講演「斎藤史のまなざし」　楠田立身

第22回　平成22・10・17
県民会館パルテホール
文部科学大臣賞　水谷きく子
表札に父の名前を残しおき女家族の十年が過ぐ
ジュニアの部
知事賞　山尾紋未
講演「日本文化と和歌」　加藤隆久

第23回　平成23・11・12
生野町マインホール
文部科学大臣賞　矢内温代
手放すと決めしわが家のこの庭に子らの金魚も小鳥も眠る
ジュニアの部
知事賞　丸山真司
講演「短歌にみる漢字あれこれ」　久保浩之

第24回　平成24・12・25
川西アステホール
文部科学大臣賞　藤原さよ子
「いただきます」殊更大きく言ってみる　だあれもいない独りの夕餉
ジュニアの部
知事賞　佐伯皐月
講演「医学と文学の間にて」　大鐘稔彦

第25回　平成25・11・30
県民会館けんみんホール
文部科学大臣賞　三津野幸代
ひとりひとり一人分のみ買ひてゆく誘蛾灯のやうな夜のコンビニ
ジュニアの部
知事賞　赤松　雅
鼎談「何を、どう詠うか『良い歌』をめぐって」
石橋妙子、小林幹也、中川昭、藤岡成子

第26回　平成26・11・22
加古川総合文化センター
文部科学大臣賞　青田綾子
家一軒覆いつくして咲ける葛離散家族のその後を知らず
ジュニアの部
知事賞　益田ひかり
講演「印南野の万葉歌・風土記」　松田和薫

第27回　平成27・11・14
姫路キャスパホール
文部科学大臣賞　種田淑子
渡らずの橋といふ名よ古里に戻らぬ人を待つ橋がある
ジュニアの部
知事賞　仲宗根琉奈
「歌合わせ」開催
島田幸典、青田綾子、奥田洋子、尾崎まゆみ、加藤直美、小林幹也、佐藤博之、新屋修一、野田オリカ、真

砂晃美、森垣岳、矢野一代、山田恵子、山田麦、（朗詠・西橋美保）

第28回　平成28・11・12　神戸市勤労会館

文部科学大臣賞　稲田政子

合歓の花の咲けば小豆の蒔き時と母の残せる農事歳時記

ジュニアの部

知事賞　矢倉ゆう

「歌合わせ」開催

吉川宏志、尾崎まゆみ、楠誓英、廣庭由利子、藤本朋世、宮城十子（朗詠山田麦）

▽**新人賞**

第46回　平成18年度

稲中晴彦

第47回　平成19年度　賀内敏彦（文学圏）

第48回　平成20年度　飯田　進（コスモス）

第49回　平成21年度　仁伍若菜（象）

第50回　平成22年度　山田郁子（ポトナム・ゑちうど）

第51回　平成23年度　岩尾淳子（未来）

第52回　平成24年度　阿部綾子（水甕）

（新人賞は以後、兵庫短歌賞にふくめられた。）

▽**兵庫短歌賞**

第1回　平成25年度

兵庫短歌賞　桂保子（未来）　青田綾子（文学圏）

新人賞　種田淑子

奨励賞　西塚洋子（象）

第2回　平成26年度

兵庫短歌賞　山田恵子（塔）

新人賞　山田　麦

奨励賞　吉永明代（水甕）　太田冨惠惠（心の花）　山中洋子（丹生）

第3回　平成27年度

兵庫短歌賞　野田かおり（未来）

新人賞　森垣岳（ヤママユ）　宮城十子（潮音・花鏡）

奨励賞　遠藤瑛子　武富純一（心の花）

▽**歌集批評会**

第1回　平成25・12・14

矢内温代『しろがね世界』

來田康男『法螺吹きの末裔』

レポーター　尾崎まゆみ、飯田進　司会・小林幹也

第2回　平成26・6・21

小畑庸子『白い炎』

尾崎まゆみ『奇麗な指』

レポーター　桂保子、楠誓英　司会・小林幹也

第3回　平成26・9・13

藤本則子『蝸牛も過客』

楠誓英『青昏抄』

レポーター　田中教子、小林幹也　司会・中川昭

第4回　平成27・2・21

久米川孝子『ことばの銀河』

武富純一『鯨の祖先』

レポーター　落合けい子、小谷博泰　司会・小林幹也

第5回　平成27・7・18

小松カヅ子『起伏の彼方』

藤本朋世『座標』

レポーター　黒崎由起子、森垣岳　司会・小林幹也

第6回　平成28・6・18

牧野秀子『水の言葉』

桂保子『天空の地図』

レポーター　尾崎まゆみ、中川昭　司会・小林幹也

第7回　平成28・9・10

生田よしえ『ふたたびの円』

吉野節子『加良怒』

レポーター　尾崎まゆみ、中川昭　司会・小林幹也

第8回　平成28・12・17

廣庭由利子『ぬるく匂へる』

玉川裕子『赤いレトロな焙煎機』

レポーター　小黒世茂、中川昭　司会・小林幹也

（黒崎由起子）

## 感謝と期待と

田岡　弘子

兵庫県歌人クラブ六十周年を記してお祝いできますこと幸せです。長くも短くも感じます年月を、関わらせて頂きましたこと感謝しております。

歌人クラブは、昭和三十二年発足と聞いています。以来県内で歌を作る者の拠り所となり、短歌大会・シンポジウム等の開催、会報・年刊歌集の発行、新人発掘と育成の新人賞など、着実に歴史を重ねてきたと言えますが、多くの結社を擁しながら「鉄幹是なり、子規また是なり」の理解と協力あってこそでしょう。

私ごとを遡れば、入会の頃代表の阪口保氏の講演で「風立ちぬ、いざ生きめやも」の文法の間違いを知った記憶があり、まだ二十代、年刊歌集は昭和三十八年初出詠でした。会報の一号から載る三十周年記念縮刷版も並びます。事務局員として参じたり、水曜会に出たり、あの日あの時あの人達との思い出はつきません。

現在、若い人達の活躍も頼もしく存在意義を深めている兵庫県歌人クラブ。時代に対応しつつ継がれてゆくものと確信もし、切に期待致します。

## 先人の遺産

楠　誓英

私は、最近仕事の都合で伊丹に引っ越しをした。そこで近くの昆陽池を散策してみると、歌碑が立ち並んでいた。

吾妹子に猪名野は見せつ名次山角の松原いつか示さむ

（『万葉集』巻三-二七九）

有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする

（『後拾遺集』恋二-七〇九）

自分が今立っているところは、古代から名高い猪名野であるのだと実感する。

むろん伊丹だけでは無いであろう。古代と現代が交錯する中に私たちは生きているのである。そこに敏感に察知できるようになりたいと思う。

兵庫県は、偉大な歌人を輩出し続けた。例えば、上田三四二（一九二三～一九八九）。

死はそこに抗ひがたく立つゆゑに生きてゐる一日一日はいづみ（『湧井』）

この歌は、読むたびに新鮮な思いにひたることができる。

歌壇の最先端を追うのも良いことであるが、流行を理解しつつも、先人が残した遺産をきちんと受け継ぎたいと思う。その手助けができる歌人クラブであって欲しいと願う。

# 講演「現代短歌と古典」

## 櫟原　聰

### 司会　尾崎まゆみ

講師の櫟原聰（いちはらさとし）先生は「ヤママユ」編集委員で、萬葉学会、現代歌人協会に所属、現代歌人集会理事等を歴任される。古典と現代短歌双方に通じ、研究書も多数刊行される。新刊『一期一会』（ながらみ書房）は一読を勧めたい。

講演は「現代短歌と古典」の題で、現代歌人と古典歌人の作品を比較して現代短歌の特徴、問題点、展望等を模索する広大な内容であった。（文中、現代短歌は太字ゴシック、古典短歌は明朝体で表記）

Ⅰ　講演

①・**かすかなる風にも震ふ水の膚表面張力円みやさしも**

**春日真木子『水の夢』**

・袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

貫之『古今集』

春日の「表面張力」は物理学用語だが、「円みやさしも」で水が球形を保つ様子を詩歌で描写する。貫之の「むすびし水」は立春で解けた水の状態を示し、水の物理性の描写が「表面張力」に相通じる。

②・**いくつもの春夏秋冬あふれかえるからだを置けり夜祭りのなか**

**内山晶太『窓、その他』**

・**大阪は神さんようさんおるからに夜も朝も川のきらめく**

**江戸雪『昼の夢の終わり』**

・うづらなく真野（まの）の入江の浜風に尾花波よる秋の夕暮

俊頼『金葉集』

・野とならばうづらとなりて鳴きをらむかりにだにやは君が来ざらむ

『伊勢物語』

・夕されば野辺の秋風身にしみて鶉（うづら）鳴くなり深草の里

俊成『千載集』

・むかしおもふくさのいほりのよるの雨に涙なそへそ山時鳥

俊成『新古今集』

内山は非日常性と自分の中の四季の感覚がマッチする。江戸の作品ではアニミズムが現代も日本人の心に浸透すると分かる。「春夏秋冬あふれかえるからだ」、「神さんようさんおるからに」と言う感覚は新しく俊頼を想起させる。俊頼の「うづら」は当時は斬新な素材であり、そこに挑む精神は現代の二人に通じる。

「うづら」は男の変心を止めた伊勢物語の歌にも登場しそれを俊成は踏まえたが、無名抄で俊恵が「身にしみて」は言い過ぎと評した。対して俊成は、これは「おもて歌（代表歌）」と反論した。一方、「むかしおもふ」の歌は「くさのいほり」に物語性があるが、「蘭省（らんせい）の花の時の錦帳の下　廬山（ろさん）

熱心にに語りかける櫟原氏

---


**明石短歌会**

明石公園内会議室
毎月第一・三木曜日

連絡先　田岡弘子
〒673－0845　明石市太寺四ノ一ノ三〇
☎(〇七八)九一二－二六七三

**奥播磨短歌会**

代表　寺尾榮禮

〒679－1201
多可郡多可町加美区豊部818
☎(0795)35－0392

**海市短歌会**

編集発行人　中川　昭
発行所
〒650－0027
神戸市中央区中町通三－一－十五
神戸コーポラス七〇一
☎(〇七八)三七一－〇二三九
神戸支部
〒653－0813
神戸市長田区宮川町四－八－一－三二三
明石多美子　方

**淡路歌人クラブ**

顧問　荒浜悦子
来田務
代表・事務局長　清水昭男
副代表　谷池さな
島田英樹
前田陽
会計

〒656-0651　南あわじ市伊加利1062
TEL・FAX(0799)39-0835
清水　昭男

**小野短歌会**

松尾　鹿次
代表　芝本　政宣
副代表　阿尾日出子
会計　藤井　久子
事務局
〒675－1371　小野市黒川町五七三
松尾鹿次
☎(〇七九四)六二－二八四六

**花鏡短歌会**

石橋妙子

〒651-0094　神戸市中央区琴ノ緒町3-2-24-603
連絡先　三津野　幸代　TEL(078)431-8665
〒658-0027　神戸市東灘区青木2-2-1-617

－運営委員－

安藤　成子
池本　登代子
奥田　洋子
黒部　道子
田口　幸子
長岡　一美
中川　裕子
増井　定子
水田　三和子
三木　雅子
三津野　幸代
安田　千富美
山本　みさよ

の雨の夜の草庵の中」白楽天『白氏文集』を元にする。これと下記の現代短歌が繋がる。

**・つゆの雨家を覆ひて降る夜半の眠りの闇に鳴くほととぎす**

**・方法がないわけでなくしばらくは大かたつむり雨の中ゆく**

**馬場あき子『記憶の森の時間』**

「つゆの雨」の歌は俊成に似る。「雨」、「夜半鳴くほととぎす」が草庵に通ずる。「大かたつむり」は厳しい現実を生きる作者の投影である。一連は伊勢物語のような物語性を想起させ面白い。馬場は最近、口語調になり、口語が楽だと述べる。ただし、結句を文語で締める等、口語と文語を併用する。これも現代短歌の特徴かも知れない。

**③・朝曇り青天となり現れた機影がヤマト・アライバルに入る**

**香川ヒサ『ヤマト・アライバル』**

・ほととぎすそのかみ山の旅枕ほのかたらひし空ぞ忘れぬ

式子内親王『新古今集』

香川の「ヤマト・アライバル」は大阪空港に飛行機が着陸する航路で、豊中市在住の作者は「機影」を見て詠んだのだろう。式子内親王の「かみ山」とは斎院を務めた賀茂神社を指し「ほととぎす」が「ほのかたら」っていた「空」を忘れないとの意である。両者、視覚と聴覚の違いがあるが気を感じ取る意識が共通する。香川は西洋化のあり方を問い続けて来たが、『ヤマト・アライバル』では日本へ回帰しており今後が注目される。

**④・あなたふとほとけの夢を見むとして人の音せぬ暁はなし**

**池田はるみ『正座』**

・仏は常にいませども　現ならぬぞ　あはれなる人の音せぬ暁に　ほのかに夢に見えたまふ

『梁塵秘抄』

池田は明白に『梁塵秘抄』を踏まえる。仏は人の音のしない晩に夢に現れるとの歌を逆手にとり、人の音がしない晩はないとパロディ化する。

**⑤・花びらは吹かれてゆきぬ墓石の上にしばらくとどまりしのち**

**松村正直『午前3時を過ぎて』**

**・陽ざしまだひつそりとしてアルティの大屋根が見ゆ御所を背向に**

**河野美砂子『ゼクエンツ』**

・山もとの鳥の声声明けそめて花もむらむら色ぞ見え行く

・夕月日軒ばの影はうつり消えて花の上にぞしばし残れる

永福門院『玉葉集・風雅集』

松村の作品は何でもない歌だが、移ろいの詠み手の第一人者の永福門院に通じる。松村「しばらくとどまりしのち」、永福門院「しばし残れる」、とこの様な詠い方が連綿と続く事に注目する。移ろいは虚しいが、移ろいの瞬間に永遠を感じる美意識が垣間見える。河野の「陽ざしまだひつそりとして」も永福門院に重なる。

**⑥・樫の実のひとり人をしおもふ身のあまつひかりの樹間をあゆむ**

**・そのかみの松浦乙女（まつらをとめ）の鮎釣ると声のほがらも浮かべみるべし**

**安藤直彦『佐用の鄙歌』**

・ただひとり　い渡らす子は　若草の夫かあるらむ　橿の実の　ひとりか寝らむ…

虫麻呂一七四二『万葉


**コスモス　葛の花**

会場　多可町八千代区
八千代プラザ
第２水曜日　午後１時

代表
〒677-0121　多可郡多可町八千代区
花の宮1171
岸本　しげ子
☎(0795)37-0680

**コスモス藍の会**

小野はつね　小野　幸恵　久保　崇子
久米川孝子　黒田　富栄　田中　恭子
林野千代美　福井　弘子　水野　美子
三宅　幸子　山本　元子　弓岡あき子

〒671－0121　高砂市北浜町生谷三八八
久米川　孝子

**薫　風**

主　幹　長谷川　正

入会金・添削料　不要
月　刊・会　費　月1,700円

発行所
〒651－0077 神戸市中央区日暮通4丁目1－7
（サニーコート日暮202号）

TEL・FAX　(078)221-0023
振替　01160-2-6567 薫風社

創刊　宮　柊二
**コ　ス　モ　ス**

〒181-0001 東京都三鷹市井の頭1-2-17

**姫路支部**

支部代表　飯田　進
運営委員　新屋　修一　大西　恒祐
大西知永子　金砺　靖子
連絡先　〒671－2233　姫路市太市中678
飯田　進　☎(079)269-0513

**コスモス**
**加西勉強会**

第２木曜日 13:00～ 中央公民館
第２金曜日 13:00～ アスティア加西

連絡先
〒675-2365　加西市畑町577
藤岡　成子
☎(0790)42-0415

**香寺短歌会**

代表　岩田百合子
会計　加藤美智子

連絡先
〒679-2151　姫路市香寺町香呂438
生田　よしえ
☎(079)232-4003

集』

・松浦川川の瀬光り鮎釣ると立たせる妹が裳の裾濡れぬ

旅人八五五『万葉集』

「鄙」は憶良の言葉で、奈良（都）に対する九州（田舎）であるが、本歌集では良い意味で用いる。安藤の「樫の実のひとり」は虫麻呂の長歌に由来する。「ひとり」が誰か明かさないが、二首目の「松浦乙女」のような人物かも知れない。「松浦乙女」は旅人の歌を元にする。このような古典を下敷きにした詠い方は戦中派の減少に伴い激減した。昭和五十年頃まで新聞見出しは文語で、「阪神破る」は破るが自動詞＝負ける、他動詞＝負かす双方の意味があり解釈に迷うが、凝縮して簡潔である。口語の「巨人が阪神を破った」は意味は分かるが、字数が増え間延びする。音数律の日本語は欧米語のように強弱のアクセントがつけ難く、長歌は人麻呂（百三九首）を頂点に衰退し、短歌や俳句が残った。従って短歌表現には文語が優れるが、その文語も廃れていく。そこで、最後に内容と表現について考える。

**⑦・あの青い電車にもしもぶつかればはね飛ばされたりするんだろうな**

**永井裕『日本の中でたのしく暮らす』**

・花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせし間に

小野小町『古今集』

話題を呼んだ永井の歌だが「されたりするんだろうな」を、松村正直が『短歌』二月号で分析している。「れ」は受身、「たり」は和らげ、「んだ＝のだ」は納得、「ろう」は推量、「な」は確認である。この助動詞、助詞の流れは日本語の用法としては現代短歌でも、古典でも不変である。その確認に有名な小町の歌を挙げるが、「にけりな」の「に」は完了ぬの連用形、「けり」、「な」は詠嘆で、助動詞、助詞の流れは永井とほぼ一致する。松村は永井は古典とは別としたが、自分（櫟原先生）は一体と見る。若い人達の短歌を分析して行けば古典との繋がりが解明されるだろう。

現代短歌は古典との繋がりが希薄化しているが、連綿たる流れは絶やさないで欲しい。若い人達が古典を勉強する事を期待する。聴衆の皆様もこれを機会に考えて欲しい。

Ⅱ　質疑（抜粋）

兵庫県歌人クラブの小林幹也氏（副代表）、岩尾淳子氏を質問者に質疑が行われた。

**Q１**（小林）　俊成は当時と伊勢物語の響きを演出し、師の塚本邦雄も現代と聖書世界の響きを試みた。古典を導入した作品の拡がりの可能性は？

**A１**　安藤氏のように万葉集、風土記を元にする手法もあるが少数派である。池田氏はパロディになっている。古典を活かすのは難しい。塚本氏の「馬を洗はば」のような韻律の試み等も良いかも知れない。

**Q２**（岩尾）　永井には未来の時間への漠然な不安があるが、万葉でも高市黒人が未来の不安を詠み、現代短歌にも繋がらないか？また、本日出なかった古典での空間について。

**A２**　確かに高市黒人は不安感を持ち、迢空が評価した。永井の不安は弱いが、共通性はあり探せば古典でも発見出来ると思う。空間の把握は赤人が定説だが、私見では家持で距離の認識が確立する。

他、河野の「まだ」が打ち消しを伴わないのは文法の誤りとの意見が出たが、『規範は知るべきだが、言葉は約二百周年周期で変化しており、自然な変化は許容して良いのでは』との見解が示され


**佐用短歌連盟**

会長　安藤直彦

グループ代表

竹田幸男　菅原艶子　新家イサ子　尾上節子　船引貴明

［連絡先］　0790(84)0150　新家 イサ子

**白珠**

兵庫県内支社

神戸白珠の会

宝塚白珠の会

加東支社

淡路支社

入社費　五〇〇円

社費（六カ月）　六、〇〇〇円

旧号見本　切手　四〇〇円

〒562－0001　箕面市箕面三－五－八

白珠社

代表　安田　純生

**高嶺**

昭和２年　早川　幾忠　創刊

昭和21年　二宮　冬鳥　継承

平成８年　井上　生二　継承

平成25年　江島彦四郎　編集

・支部長・運営委員　野瀬　昭二

・在県同人

石橋　光子　井口　通子　大塚　照美

坂田嬉和子　正法地清美　松田　郁子

松田　芳子　福井テル子　奥家登喜枝

糸田冨美代

△事務局　伊藤　敦子

〒673-0011　明石市西明石町4－7－21

☎(078)927-4439

流派を超えた短歌交流誌

楠田　立身　編集

**象**

(SHO)

入会歓迎

〒670-0843

姫路市城東町清水13-7-404

楠田方　☎(079)285-1695

短歌ぐるうぷ象の会

**新月**

編集発行人　筒井早苗

発行所　奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西二－六－三〇

☎(〇七四五)七五－六七〇〇

芦屋支部

西村　郁

☎(〇七八)七三三－八五六九

西宮支部

市川美恵

☎(〇七九八)五三－〇四五六

**但丹歌人**（隔月刊）

発行　但丹歌人会

代表　尾形　貢

編集発行人　中島眞喜子

〒669－5229　朝来市和田山町宮438

☎(079)672-2334

運営委員　足立美津子　井上　澄子　衣川由弥子　高橋　博子　中島眞喜子　平野　君枝

た。さらに、内山や河野の試みは古典と現代短歌との融合である等の肯定論も出てこの問題の議論は白熱した。それこそが櫟原先生が企図された事だったのだろう。

Ⅲ　所感

現代短歌と古典は感性（講演内容①）、美意識（⑤）、新しさの追求（②）で通底し、日本精神で結ばれる（③）。交流（④）、継承も続く（⑥）。両者の関係の希薄化は進むが言語構造の基盤は固い（⑦）。ユング心理学では個人意識の深層に時空を超えて普遍化した集合的無意識がある（例）アメリカ人の好戦性は先住インディオに由来する等）。本日の講義で大和言葉の集合的無意識の存在を確信した。希望を持ちながら、講演末尾の櫟原先生の宿題にも挑みたい。司会の尾崎氏の進行調整の尽力にも感謝する。

（來田康男）

## 平成28年度　第3回幹事会報告

3月27日（月）、神戸市勤労会館にて開催。出席幹事26名。委任状22名。三津野幸代氏の司会。安藤代表の挨拶。議長に黒崎由起子氏を選出。

**◇平成28年度事業報告**

①4月29日（金）神戸短歌祭「兵庫短歌賞」授与。講演及川（晋樹）隆彦氏「私（編集者）から見た今日の歌」

②6月14日、「会報」第195号、1000部。編集　森嶋郁子、結社広告44、担当山田文。

③6月18日、第6回歌集批評会。兵庫勤労市民センター。牧野秀子歌集『水の言葉』、桂保子歌集『天空の地図』57名参加。

④9月10日、第7回歌集批評会。兵庫勤労市民センター。生田よしえ歌集『ふたたびの円』、吉野節子歌集『加良怒からの』57名参加。

⑤10月12日、ふれあいの祭典委員会後、第2回幹事会

⑥11月1日、『年刊歌集』第56集刊行、250篇。350部発行。編集三津野幸代

⑦11月12日（土）ふれあいの祭典兵庫短歌祭　於神戸市勤労会館大ホール入賞者表彰、作品評、「現代歌合せ」判司吉川宏志氏、

⑧12月13日、「会報」第196号、1000部。編集　森嶋郁子、歌会広告51、担当山田文。

⑨12月17日、第8回歌集批評会。兵庫勤労市民センター。玉川裕子歌集『赤いレトロな焙煎機』廣庭由利子歌集『ぬるく匂へる』。48名参加。

⑩平成29年1月15日、兵庫県歌人クラブ創立60周年記念祝賀会於神戸ポートピアホテル出席者86名(参加予定者99名)

## 平成29年度　第1回幹事会

（第3回幹事会に続いて）

**退任幹事**　高井忠明・竹村公作・たなかみち・松尾鹿次・山中洋子　**新任幹事**　大西よし子・芝本政宜・來田康男・新屋修一・藤本朋世・山本圭子

**◇29年度事業計画**（主なもの）

①11月18日ふれあいの祭典兵庫短歌祭、於淡路市サンシャインホール。オープニング（淡路恵比須舞）講演「淡路島の和歌の路」


**津布良**（つぶら）

代表　兎田　孝子
編集員　遠　洋子
　　阿部ツヤ子

発行所
〒661－0046　尼崎市常松一－一九－二九
松村　和子
TEL FAX（〇六）六四三三－五五三七



**とべら**
（月刊）

代表者　尼子　勝義
発行所　赤穂短歌の会
　　とべら発行所

〒678-0163　赤穂市高雄1876-1
尼子方
☎(0791)48-0137



**潮音**
大正4年創刊

編輯発行人　木村　雅子
〒248-0011　鎌倉市扇谷3-11-4
神戸歌会指導　石橋　妙子
〒651-0094　神戸市中央区琴ノ緒町3-2-24-603
連絡先　三津野幸代 TEL(078)431-8665
〒658-0027　神戸市東灘区青木2-2-1-617
幹事　増井　定子　三津野幸代
　　山本みさよ　安田千富美
会計　島崎　みち
監査　三木　雅子



**丹生** TANZYO

**主張**　生活写実を主体として真剣に作歌力を深めようとする集り
**創刊**　昭和二十一年
**代表**　兼貞　靖行
〒673－0424　三木市自由が丘本町2－232
☎(0794)83-0803
**編集同人**　井口通子・林　茂代・藤井貞子・前中　仁・兼貞靖行・上倉佐田子・山中洋子・山本樹一・土居きよ
**事務局**　〒673-0533 三木市緑ヶ丘町東2-11-5
**連絡先**　山中洋子方
☎(0794)84-0296
**振替口座**　00950－9－195197



**西脇短歌会**

会長　藤中　光代
副会長　三村　時枝
〃　藤本　勝子(事務局)
会計　杉岡　静依

事務局
〒677-0043　西脇市下戸田578
藤本　勝子
☎(0795)23-2377



**茅花短歌会**

短歌文学の鑑賞と作歌についての研修を行い、清新自由で個性に応じた作歌を目指します

毎月第二水曜日九時よりふれあい交流館で勉強会
隔月に茅花誌を発刊

講師　沼田　俊郎
代表　前田　昭子
〒675－1113　加古郡稲美町岡一六三〇
TEL FAX（〇七九）四九二－一七六六



**千鳥短歌会**

山桜や紅葉に染まる山々。波荒く、また凪ぎる瀬戸の海。渡る千鳥。
取り巻くすべてが歌心を誘う恵まれた環境にある短歌会です。月一回、第一土曜の午後行われる例会は活気に満ち、和気あいあいの楽しい雰囲気です。

代表　山田　恵子
〒656－0426　南あわじ市榎列大榎列七五一－五
☎(〇七九九)四二－二〇六二

## 平成28年度 兵庫短歌賞

### 藤本朋世（砂金・桜狩）

1947年生まれ
淡路島出身
西宮市在住
「砂金」「桜狩」所属
第五歌集『座標』
2015年上梓
趣味　フラメンコギター

#### 冬日向

・うつらうつら籐椅子もろとも移りゆく彼我のわかたぬ冬の日向へ
・明るさをひろげてはしる冬しぐれ有縁無縁のなべてのうへに
・繭ごもりといふほどならず午睡よりまだ覚めやらぬこの身の火照り
・鳥のこゑ睡魔のあはひつづきをり此の世の貌にもどりゆくまで
・冬うらら地に生ふものに翳りなし異生羝羊のこころすらだに
・昼の月うかぶる空とひびかふは冬木にやどる朱の返り花
・散り急ぐことわり知れず陽だまりにましろさざめく山茶花のはな
・しづけさはあまねき光のゆゑならむ友の逝きにし冬の朝も
・鵙のこゑひとすぢ奔りしのちのそら金輪際の悲の器なり
・とこしへの夢をたがへし返り花ひつきやう人の死てふ開花も
・存念のあるべくもなし朴落葉まつたきかたちに枯れゆくことに
・忌み枝を剪られくろずむ幹の瘤にんげんなれば「我」てふもこぶ
・冬麗の空にうきたつ裸木の枝のひろごり余剰のあらず
・冬陽さす坂のなかばに歩のゆるぶきのふもあすもなきが思ひに
・目を瞑り西日にむかへばまなうらはたちまち響動むくれなゐの海
・歩道橋わたらむとしてかろきかな生死一対はこぶわが身の
・よろこびはかく約しけれ陽を浴びて色あたらしき柊の花
・砂利道を踏みゆく音の幽かなり今生のいのちまろびゆくおと
・万の葉の打ちあふひかりに紛れゐむ永遠といふものの燿ひ
・先の世に掛けし願ひのありやなし陽のほとぼりのこのうつしみに

## 新人賞

### 鈴木美樹（六甲）

1992年生まれ
高砂市在住
「六甲」に所属し
田岡弘子氏の指導を受ける
短歌歴9ヶ月
趣味　旅行・読書

#### 就活

・「あなたには中身がないように見えますね」電車の固い座席で泣いた
・三年が経った今でも身が震う「圧迫面接」の棘抜けぬまま
・十二月ピストル音が鳴り響き内定掴めと駆け出す学生
・玄関の鏡に映す完璧な笑みを貼り付け今日も就活
・「女性はねぇ賢いけれど出産が…」男女平等の限界を知る
・何十回言っただろうか寝言にも出そうな自己の長所と短所
・星占い一位の朝に届きたり不採用通知優しい言葉の
・敵だけど仲間でもある人たちと健闘祈りあって別れる
・閻魔様に舌抜かれるか繰り返す「御社が第一希望です」
・ラブレターのように思いを込めて書く履歴書なれど五度目の失恋
・真っ黒なスーツで並ぶ学生の笑顔の裏に映るゲルニカ
・他人からの○×評価に揺れる日日エスケープボタンを連打したいよ
・店先で手に取られては品定めされる胡瓜の気持が分かる
・正気などとっくに失いかけているブラックでもいい内定ください
・もうどこでもいいからピリオド打ちたくて目に入る企業一斉エントリー
・きみはもう立派な大人と言われおりっぱなおとなリップナオトナ
・どこからも必要とされない私なの就活自殺は百四十人
・四字熟語「圧迫面接」に慣れぬまま タイムリミット就活終える
・リクルートスーツを床に脱ぎ捨てて わたしに戻る呪文唱える
・自分ではない自分で勝負して内定取ったのはどの自分だろう

## 新人賞

### 上篠かける（玲瓏）

1991年生まれ
大阪市在住
「玲瓏の會」所属
同志社短歌を設立
第一回石井僚一短歌賞候補

#### ハロー、アンダーピッパラ

・酸性の雨もはじけるやわらかき疣を片手にして歩く
・触れた、ではなく触った、と思い振り返ればイヤホン抜けて工事音
・逢いたくてもう逢えない人　七色も見えない虹の端の藍色
・（ああ、この人は十回くらいは殺してる）濃度の低いごめんねをまた
・野沢菜の直立区画そのままに枯れていくのを見ていた　冷たい
・白色の烏の気配に二度見する、二度見直してそして忘れる
・スフレパンケーキのくずれおちそうな振動ひろいテーブル　あ、孤独
・誰からも愛されている空間にぼくのかたちの穴があいてる
・ていねいに齧り残した林檎の実　既読のつかない四、五秒のある
・どこまでもブルーの空に殺されて繰り返す犬の虐待動画
・ねむるように畳んだタオルの冷たさに驚けば月に刺されて血潮が
・木星と地球の距離の妄想をトイレッ

トペーパーが見ている
・ココア入りミルクが世界で一番やさしくて、やさしくて、やさしくて、尿
・手ごろな紐で首をくくるふりをして移行したあやとりの竹箒
・中東の青い錠剤をせつなさの塊として飲み込んで吐く
・頸には底なし沼もがこうとするほどにゆるやかで傷のつかない一日
・低反発枕は憎い　中指で作ったくぼみに鼻をあてがう
・誰かに会える気がして丑三つに窓をひらいて、瞬間に冬
・ペットボトルの水が転がっていて二人手を繋ぎ飛び降りた少女のニュース
・通り魔に殺されたくてピッパラピッパラ夜を歩いています

## 奨励賞

### 鈴木裕子（六甲）

1963年生まれ
高砂市在住
短歌歴3年
2015年菅原道真公奉賛献詠祭にて兵庫県知事賞受賞
「六甲」に所属し田岡弘子氏の指導を受ける

#### 手をつなぐ母

・ぽつぽつと雨の降りだす気配するアルツハイマー告げらるる午後
・医師の声「海馬が委縮してますね」真夜のベッドにリフレインして
・そういえば母の電話は一日に何度もかかりぬ不安な声の
・コレクションしているような冷蔵庫中には豆腐と豆腐と豆腐
・家家の明かりがもれる午後八時帰らぬ母の足取りたどる
・派出所で現住所本籍記入して七度目となる捜索願は
・午前二時帰り来し母何事もなかったようにただいまと言う
・起きるのも着替えも食事もいやいやと駄駄っ子になる母の一日
・毎朝の「あんた嫌いやあっち行け」母の言葉に慣れることなし
・今日は背に幼子おぶっていると言う小さな背中へねんねんころり
・年齢を刻まないまま暮らすのか母は時折二十歳に戻る
・モノクロの写真の中に笑っている幼い私と手をつなぐ母
・悲しみは悲しみのままそっとしまう硝子細工を手に抱くように
・光さすことない厚い雲の下轟きて「のぞみ」が走り抜けたり
・思いきり泣きたいときに見る映画「私の頭の中の消しゴム」
・カフェオレとチョコパイと本があればいい私が私でいられる時間
・「全部うそ」お茶目な母が微笑みぬエイプリルフールの明け方の夢
・もう言葉忘れかけてる母なれど今日は言われる何度も「おおきに」
・今にして聞けないことの多くあるたとえば母さん幸せでしたか
・カーテンを開けるたび季節流れゆく母と私の暮らしも共に

## 奨励賞

### 遠藤和子

1947年生まれ
神戸市在住
コープカルチャー短歌の講座を受講して一年
趣味　阿波おどり、写真・ガーデニング

#### 動物ビスケ

・おはようと招き猫にもお辞儀して今日が始まる老いたる母の
・写真見て「これは誰か」と聞く母に「三年前の母さんこれは」
・真っ白なシクラメン置きささやかな幸せ広がる冬の日だまり
・来月は二日に来るねと言う我にそれまで生きているかね？と母
・会うたびに帰った後が寂しいとつぶやく母に笑顔を返す
・耳遠き母との電話きょうもまた辻褄合わぬ会話で終わる
・ほんのりと薄紅つけてふくらみし庭の隅なる海棠ざくら
・若かりし母との花見　弁当は巻き寿司だけをぎっしりと詰め
・ひたすらに働き抜いた母なれど終のすみかは一つのベッド
・湯灌とはこういうものかと久々に湯あみした母なにげなく言う
・カーテンに映るオリーブの影ゆれてしばしまどろむ風の夢追い
・蚊帳つりて母とほたるび眺めつつともに眠りし幼きあの日
・穏やかな母の寝顔にせつなさと諦めの影つと走りけり
・カンカンに晴れあがった夏空にセッセセッセと鳴き急ぐセミ
・こんなのが食べたかったと微笑みて母が手を出す動物ビスケ
・「動けない身なのにやはり生きてるよ。」寝たきりの母ぽつと呟く
・哀しみも怒りも胸に秘めたままさらりさらりと生きてきた日々
・三週に一度おとずれツメを切る　切った長さが母の三週
・朝顔のつるどこまでも伸びて行け時計回りと違っていても
・ぺこちゃんのぺろぺろキャンディーなめながら頷いているははそはの母

## 奨励賞

### 菅原艶子（コスモス）

1933年生まれ
佐用町在住
コスモス短歌会会員
2009年平成の歌会京都府知事賞受賞
2011年第六回岡山県高梁市清水比庵会短歌部奨励賞受賞
歌集『夕菅の花』

#### 冬の虹

・つむじ風渦巻くなへに舞ひ上がる一葉ひとはを鳥かと思ふ
・ローカルの無人の駅に啼くきじに人が雉子鍋話はじむる
・雪をする足あとを見るハンターが雉

子かとも言ひ山に入りゆく
・声上げて啼くも聞きたし狩り人が剥製にしたる顔あかき雉
・減反が国是となりし幾年の休耕田が雉子を遊ばす
・母雉子が草生に何かくはへしをかけ寄る雛の口寄せやさし
・物音につとかけ出す母雉子の後をつけゆく雛のひたすら
・母雉子につきて走れる雛鳥が短かき翼をはたたきもする
・雉子どちのひそみてあらむ山を越す時雨のあとに冬の虹たつ
・雨あとの冬の中空主の虹に離れてあはく副虹のたつ
・〈子を守る焼け野のきぎす〉の母性愛あはれみて読む子殺しの記事
・呼ぶ子とも嘆かひとしも啼く雉子のかはたれどきをしじまに響く
・赤まんま・つゆ草・野菊・虎の尾と休耕田の畦径を行く
・痛む足ながらに歩く歩かむか歩けぬやうになるをおそれて
・雉子のごととととと走れぬ足なれど日にち薬と言ふにほぐるる
・雉子の数減りしと思ふ山鳥の啼くは平和のしるしなりしに
・はがねかと紛ふばかりの色に染み幾年経しや自在鉤光る
・屋根裏にしまひ置かれし糸繰機回せば回る祖母のごとくに
・指先に移る画面も迷路なれスマートフォンをわれも始めて
・金婚の後十余年をながらへて御大師山の山かげ歩む

## 平成28年度「兵庫短歌賞」選考経過
## 無名の輝き　更なる飛躍を

吉野　節子

平成28年度「兵庫短歌賞」選考委員会は3月17日神戸市勤労会館にて選考委員8名全員出席のもとに開かれた。**応募総数43**。選考は各委員が一位に10点、二位に9点と以下十位までを点数化（別表参照）、高点を中心に一次審査が行われ、続いて二次審査に入り、慎重かつ熱心に討議を重ねて決定した。

**・兵庫短歌賞「冬日向」**

自然と自己を同化し、手馴れた表現で、実力ある作者を思わせる、内容は哲学的、宗教性を帯びている、と高く評価された。うまさに流されているという意見も出た。

**・新人賞「就活」と「ハロー、アンダーピッパラ」**

最高点に輝いた「**就活**」は現代の若者の切実で深刻なテーマを客観的に詠い、リアルで平明、20首うまくまとめていると多くの支持を得たが、報告に終わっているとの厳しい発言もあり将来に大いなる期待をこめて新人賞となった。「**ハロー、アンダーピッパラ**」は、感性の良さ、若者の心の痛み、深い闇が、新鮮な表現で詩的に処理され、リアルな重みで迫る、新人賞にふさわしいと評価された。

**・奨励賞三作品について**

「**手をつなぐ母**」と「**動物ビスケ**」は同点、どちらも母の介護、老人問題を扱う。母のかなしみは同時に家族のかなしみ。「**冬の虹**」は雉の歌に始まって、減反、子殺しと社会へのまなざしに発展してゆく視野の広さに注目。

**・他に「太鼓」**は抑制のきいた詠風、「**V8・シーマ**」は勢いの魅力、「**四季によせて**」は白寿ならではの佳品と評された。「**誕生**」は人間とコンピューターの未来への不安感を詠む意欲作。

### 平成28年度兵庫短歌賞等点数表
（評価順位を点数に換算）

| 作品名＼選者名 | 安藤 | 尾崎 | 桂 | 小谷 | 小林 | 中川 | 藤岡 | 三津野 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 手をつなぐ母 | 4 | | 10 | | 1 | 6 | | 6 | 27 |
| 三人へおくるレクイエム | 7 | | | 7 | 6 | | | | 20 |
| V8・シーマ | | 9 | 8 | 3 | | | | | 20 |
| 冬日向 | 10 | 8 | | 5 | 2 | 4 | 5 | 9 | 43 |
| 就活 | 8 | 6 | 9 | 2 | | 10 | 7 | 10 | 52 |
| ぐう・ちよき・ぱあ | 9 | | | | | | 8 | | 17 |
| 太鼓 | | 2 | 3 | | | 9 | | 8 | 22 |
| 動物ビスケ | 6 | 4 | 4 | | | 7 | 6 | | 27 |
| ハロー、アンダーピッパラ | 1 | 3 | 5 | 4 | 9 | | 9 | | 31 |
| 冬の虹 | 2 | | | | | 8 | 10 | 3 | 23 |

上位10作品まで記載

**選考委員**
安藤直彦・尾崎まゆみ・桂　保子・小谷博泰
小林幹也・中川　昭・藤岡成子・三津野幸代

**事務担当**
吉野節子・山田　文

### 受贈歌誌・会報等

コスモス姫路（飯田進）・海市（中川昭）・ふれあい（山の街短歌会）・綱手（井上美地）・幻桃（幻桃短歌会岐阜市）・姫路水甕（小畑庸子）・花鏡（石橋妙子）・旅笛（角倉羊子東京）・文学圏（下村千里）・白圭（内海永子）・とべら（尼子勝義）・夢（山根晴正寝屋川市）・但丹歌人（中島眞喜子）・礫（竹村公作）・六甲（志方弘子）・薫風（平井恭治）・茅花（前田昭子）・象（楠田立身）・津布良（兎田孝子）・丹生（兼貞靖行）・心の花・但馬歌会通信・鳶が城便り（足立勝歳）

**文芸誌**　眺天（田中蒼治）・印南野文華（印南野半どんの会）

**会報・歌誌**
風（日本歌人クラブ）・詩歌の森（日本現代詩歌文学館館報）・京都歌人連盟（坂部昌代）・大阪歌人クラブ（田上成彦）・短歌　堺（小西美根子）・和歌山県歌人クラブ会報（水本光）・梧葉（梧葉出版）・長野県歌人連盟会報（松田康美）・大阪歌人クラブ（上田明）

### 兵庫短歌賞全応募者（到着順・敬称略）
（公募・ノミネート）

谷畑恵山、小畑恵子、嶋澤　隆、鈴木裕子、森元満子、大江美典、尾崎順子、長谷川喜世子、高田奈加子、石飛俊郎、藤本美智子、藤本朋世、藤本太子、内藤みさを、宮崎　浩、伊澤信雄、鈴木美樹、西村節子、山本圭子、岡本絹江、臼井てる子、渡辺啓子、畑登代子、島田英樹、岸本万由美、矢野一代、遠藤和子、高木晋一、棘木正市、上篠かける、眞住　彰、老月良一、朝倉恵子、吉田千代美、長尾　宏、吉川さわ子、真砂晃美、菅原艶子、小田部桂子、塩見俊郎、桂日呂志、山下恵理子、多田真香

平成二十八年度

# 兵庫のうた　秀歌抄　『年刊歌集』第56集より

## はじめに

安藤　直彦

改めて、短歌は読者と共有し合うことによって作品となることを思う。よい読者に出会った作品は幸せである。それだけに、人の作品を「読む」ということには責任が伴う。「読む」ことは「詠む」ことにつながっている。お互いよい読者でありたいものだ。この『年刊歌集』はそうした場であることを願う。

## 兵庫短歌賞選者が選んだ「わが注目した歌一首」（あいうえお順）

**安藤　直彦選**

鳥一羽の截り分けゆきし後の空　無傷無韻に藍かぎりなし　北　浄代

一羽の鳥が真っ青な空を飛んで行き、その後の静まりを詠って「無傷無韻」の漢語の調べよろしく、新しい生の蘇りを得たような小世界の現出に驚く。

**尾崎　まゆみ選**

人間の息のぬくさの夕風がしばしとどまる盆の窪あたり　藤岡　成子

項にふっと風を感じる、それは亡き人の吐息。艶なる寂しさが染みる。

**桂　保子選**

「恵みの雨」を超えて降る雨あぢさゐの藍の地球はうなだれてゐる　池本登代子

異常気象への視線から地球の危惧感へ繋ぐ柔らかな批評性が魅力の一首。

**小谷　博泰選**

花終へて退屈さうな木犀の葉隠れにおや鳩の巣作り　田岡　弘子

「退屈さうな」や「おや」のかもしだすユーモアが絶妙である。

**小林　幹也選**

水中に眼開きて見るやうにきらめく　あの日の麦藁帽が　太田冨美惠

忘れがたい光景を、映画のワンシーンのように描きだしたところが秀逸。

**中川　昭選**

ほほゑみの清清として山笑ふ吾にも賜ぶべし命の泉　故新谷　英子

「山笑ふ」春なのに「命の泉」を希求する深い非命観の歌。

**藤岡　成子選**

神さまは死なないのかとわれに問う幼の目を見て死なぬと答う　故上田　一成

下の句に病魔と戦っている作者ゆえの心理的な飛躍があり迫る。氏は一月に永眠された。

**三津野　幸代選**

生まれたる理由、生きてる意味は何、考へるのだ猫は日向に　田岡　弘子

日向に目を閉じている猫はどっぷりと思惟の界に沈む哲学者との発想が凄い。猫に自己を重ねている。

## 今を詠う

生田　よしえ

①「老人ホーム入所案内」「就活用会社案内」「来世案内」　小畑　庸子

②ホバリングののち下降せるオスプレイを泳ぐがに手を振り待つ被災者ら　楠田　立身

③気配にて開くるまなこに佇ちたまふきみあり起きむとするを制して　野瀬　昭二

④青柿が屋根のトタンを打ちて落ち敗戦の日の午後深まりき　青田　綾子

⑤電柱の影長くなりバスを待つ人の後ろに冬は来てゐる　阿部　綾子

⑥プルトップ開けば泡のあふれたるあの夏草のあまやかな白　尾崎まゆみ

⑦攫はれる感じもうなく拾はれて後部座席に駅まで五ふん　たなかみち

⑧やはらかき手に置きゆきし煤竹の茶筅も花の象と思ふ　中川　昭

⑨教へ子のデモに行きしと明るかり昭和のデモの昏く迷ひき　清水　誠郎

⑩訴への〈声の掠れ〉をスルーして主治医が操る液晶ディスプレー　三宅　幸子

①看板の文字を提示し、高齢化社会の一面を切り取った独自性、人生を見尽くした人の余裕の結句が深い。②〈震度7〉に揺れた故郷「益城」の連作の一首。「被災者ら」とする被災者でない負い目。しかし、詠まずにはいられない。下句の的確な描写に臨場感がある。③見舞客のきみとの場面を具体に徹し、平易に表現。二人の心情まで立ち上がらせて味わい深い。一首の平仮名多用も魅力。④「敗戦」は反戦への意志表示。柿の実の落ちた後の静寂に深まる思い。⑤季の移ろいの早さ即ち人生。下句の表現に工夫がある。⑥夏草の白はあまやかな若い日の恋だろうか。現在から過去への転換が鮮やか。⑦攫われる感じに遠い今、「拾はれて」に実感がこもる。加齢は時に残酷。⑧「花の象」は茶筅を置いて行った女性の美しさを想わせる。ナイーブな感性の作品。⑨書を読み、思索し昏く迷った青春時代と現代の学生の比。時代の流れに寄せる感慨は複雑。⑩「スルー」の語が効果的。一首に客観性をもたせ知的な作品となった。

## 私の選ぶ十首

牧野　秀子

鮮紅の石榴裂けたり朝の路地シリアで子供今日も死ぬらむ　足立　勝歳

何処に向かつて飛ばせばいいのか紙ひかうき戦争は嫌だと太太書いて　池本登代子
鍵形の銀のペンダント胸に置き車中無防備に少女は眠る　内海　永子
「またこんど」の今度が二度と来ないこと知りて若葉が風にざわめく　黒崎由起子
衝動買ひしたるやうなと振り返る人生といふ私の買物　田岡　弘子
攫はれる感じもうなく拾はれて後部座席に駅まで五ふん　たなかみち
ふんばりのきかぬ傷みの広辞苑ねぢれもたれて崩落近し　中川　昭
音もなく消ゆる記憶と砂時計どこか似てゐる秋の夕暮れ　西塚　洋子
いつかわたしはわたしを手放す　せせらぎに笹舟ひとつうかべるやうに　西橋　美保
寂しいと言へば寂しい楽しいと言へば寂しい桜咲きそむ　益永　典子

足立作品は石榴の鮮紅が、いまも続く戦争の惨禍を想起させ、池本作品は軽やかな紙飛行機に重い反戦の文字を負わせて、いずれも印象的である。内海作品では平和な日本の若者の姿を描写しながら、批判の目差も十分に感じられる。黒崎作品は何気ない別れ際の言葉が永遠の別れにもなることを、やわらかに詠む。田岡作品は、思い切ったような初句ではあるが、人生は刹那の選択の積み重ねであると思えば納得させられる。たなか作品は日常の中の微妙な感覚の違いを軽やかな表現で掬い取っている。中川作品の広辞苑は日本語の象徴に他ならないから、その崩壊は取りも直さず日本語の崩壊を意味するだろう。西橋作品は誰もが心の奥底に抱いている不安を、どこか別世界に誘うような不思議な感覚がある。益永作品の寂しさは、春らんまんの季節だからこそ覚える寂寥が、身に沁み透ってくるようだ。

## 私の選んだ十首

益永　典子

### 自然

長良川の河原ほすすきほほけそめ月の光の中の虫たち　秋本　多恵
夕影の車窓にながるる松並木いつとはなしに闇にしずめる　鬼丸　貞彦
梨の花に吹く密教の風光り蜂寄せつけぬ匂ひ放ちぬ　桂　日呂志
からたちの花の間より出できたり黒揚羽蝶紋をほどきぬ　小松カヅ子
メジロ五羽ネクタイ鳥も一羽ゐて金木犀は鳥籠のごと　西村　節子
葱のにほひの自転車すぎて如月の薄暮の坂に時雨きたりぬ　藤本　則子
いくとせをへてかわりゆく海岸線きょうも流沙はながれつづけて　藤本美智子
池に蝦蟇葉に青蛙の梅雨じめりとんと見かけぬ舞まいつぶろ　水谷　英子
綻びを解くは神の手たちまちに一糸を抜きてざんざのさくら　三津野幸代
六甲のなだりに雲の影おけば群青いろ見す早春の木立は　保田　ひで

### 動物・植物

吉田　千代美

置かれたる場所でただ咲くたんぽぽのただが難くて迷へり今日も　秋本　多恵
仏壇のうすくらがりへ声もなく冬の蚊すいと消えてゆきたり　阿部　綾子
杉木立の闇深まれるひとところ銀竜草の鱗片光りぬ　時里　直子
百年を言いて住宅売りに来る蝉のしきりに声降らすなか　福山　裕恵
白蓮は寒のもどりにやや濁りにごれるままに花ひらきたり　藤本　太子
両耳をペタリとねかせ首のばし吾が撫でる手を待ち受ける猫　細目　早苗
谷川の浅き水辺に枝しなひ森青蛙の卵が触れ合ふ　楊井佳代子
きらきらと煌めきやまず須磨の海　銀の小魚を放ちたるやうに　保田　ひで
ひひらぎの白き小花の咲きゐたる家売りてより七度目の冬　矢内　温代
はつ夏のメタセコイヤに風渡る太古の象も聞きしその歌　山本みさよ

### 生活

楠田　智佐美

とろとろと煮込みてをれば眠くなる遠くでだれか呼ぶ声のする　足立　晶子
ちゃぷりとも音のないのが気になりてそっとのぞきぬ夫の長風呂　末澤千世子
巣の上に坐りて慈母のやうな鳩日がな日がなをただ静かなる　田岡　弘子
たそがれを混ぜて飲み干す伊右衛門にわが残量をたしかめている　武富　純一
むくむくと臓器も生ゆる春ならむバスケット提げて森へゆかうよ　たなかみち
かへるでの色づきしるき朝を打つメールきのふの日昏れのカナダへ　藤井　幸子
朝の水たつぷり注ぎし花壺の内なる闇へ穂すすきを挿す　牧野　秀子
一週間の天気予報に雨はなしよろしよろしと吊し柿剥く　藤岡　成子
降るほどの星空といふ感傷を喪くしてしまつた吾も時代も　三津野幸代
ファックスもメールも持たぬわたくしを時折ほぐす白い電話機　山田　文

### 社会・政治

南　輝子

朕がため死ねとの命より解かれて世に遅れつつ晩年となる　土居　正
遠花火はぜて明るむ空のはて爆撃やまぬ中東がある　青田　綾子
キャデラックより広島の地に降り立てりオバマは核のボタンを隠し　芦田　礼子

「恵みの雨」を超えて降る雨あぢさゐの藍の地球はうなだれてゐる　池本登代子

原発の核のしみたる東北の木々は芽吹きて人寄せつけず　桂　日呂志

葬儀無し遺骨は撒かれて墓もなし誰かを偲ぶことも能わず　栗田　明代

戦乱のとほき昭和を語らむにあいつもこいつも死んでしまうた　松尾　鹿次

祈りの絵七十年目無言館画家目指しつつ征きにし人ら　森田　豊子

「建國の日」といふ気配見当らず街は賑はふ春節祭に　保田　ひで

ときどきに警笛のやうな音ならす補聴器つけて聴く宰相のこゑ　矢野　義信

## 生・老・病・死　伊藤　敦子

初期化されるごとくに老躯は一片の雲なき空のひかり浴びゆく　土居　正

サイレンに運ばれをりて払暁の意識に医療センター遠し　野瀬　昭二

残されし命を燃やすすべなくて秋の落ち葉をかさかさと踏む　伊藤左重子

神さまは死なないのかとわれに問う幼の目を見て死なぬと答う　故上田　一成

赤き実を啄みている鳥のおり鳥もこうして老いてゆくのか　楠田智佐美

かたわらに白い椿が咲くというベンチを探す死者に会うため　黒崎由起子

生まれたる理由、生きてる意味は何、考へるのだ猫は日向に　田岡　弘子

まだ生きていることとして申し込む四ヶ月待ちの高齢者講習　髙井　忠明

天空に鳥も生(しょう)あるものなればゆるやかに飛ぶ羽をうちふり　中川　昭

過ぎ来しはあるかなきかの運命線いま細細と真直ぐに伸びて　船橋　貞子

## 世態　松尾　鹿次

開拓の一村消えて青む野の底ひに泉みず噴きており　青田　綾子

不法投棄の芥の谷を蛇行せる春のみづおとしろがねのいろ　生田よしえ

イスラムの優等生が銃を持つ日本のオウム真理教に似て　桂　日呂志

なつかしきもの見し思ひ元旦を隣家は軒に日の丸かかぐ　岸本しげ子

ヘルパーの休む元日気がねなく時間気にせず思ひきり寝る　久米川孝子

生きた証死んだ証も曖昧に逝くを美化することを哀しむ　栗田　明代

安保法未明の可決なんとなく貧しき秋のおとろえおもう　船引　貴明

選挙権十八歳に下げられて日本の政治何処へゆくや　前田　昭子

再会の青年眩しき笑顔見す東北ボランティアへ今も通ひて　政野　哲子

原発の歌詠みしわれをば痛罵せし老女をりたり五年前なり　矢野　義信

## 仕事　河村　公美

窓口に平素見られぬ応対は店長の目感じいるらし　上月　昭弘

出世欲わづかに澱むその淵のうへ吹き過ぎる夏の夜風よ　小林　幹也

客寄せの旗振りが四人五人居て客が一人も居ない給油所　來田　康男

年越えて蒔きし隠元豆　アタリアの唐瓜が生る何んのいたづら　故新谷　英子

秋野菜作ると片付けする畑の南瓜いくつか日焼け傷おふ　菅原　艶子

メーデーの連帯、共闘、鬨のこゑ団塊世代の遺物とゆらぐ　林　二子

子ら帰りぽつんと一人教室で明日の板書を書いては消しぬ　日向　海砂

蔵開きの酒にほころぶを摺り唄に仕込み唄聴きなほもほころぶ　福島　妙子

病院の朝はゆるりと明けきたり朝餉の支度が妙に恋しき　藤井　貞子

楽しきと初穫り野菜を送り呉るる農村移住に馴染みしや義弟(おと)　藤本　幸雄

## 愛・恋　廣庭　由利子

雛の酒選びて今宵は灘地酒熱燗になし亡き夫を呼ぶ　石橋　妙子

真白なる麻布にくるみ抱きくるを埋めむとする北を枕に　安藤　直彦

汗にほふ隣の席の青年に遠くなりたる子をおもひをり　伊藤　敦子

雪女出会わば髪に挿しやらむ櫛の樹氷の花のかんざし　後藤　政基

親よりも子よりも頼れる老い夫の寝息確かめそと触れてみる　末澤千世子

うしろから背にあてくれしてのひらのあつきをきみのすべてと思ひぬ　西橋　美保

埋み火を熾さず裡にひそと抱く一世の旅の恋の切り札　林　二子

指切りの約束忘れて現在となる心の隅の小さき蝋燭　水田三和子

燃えあがる焚き火のきらめき拒むやう俯くばかりの少女によりそふ　宮城　十子

みどりまた緑のこやま重なりて夫との日々を五月の畑に　米子香珠子

## 旅　福島　妙子

遠山の峰より生れてすずかぜはわれのからだの芯をゆるます　生田よしえ

瀬戸口の両の小島の頂きに二秒毎なる海路の灯　岡本　博子

いちように屋根に石置く集落の寄り添うさまのなべて海向く　北　浄代

都会にはナイフの寒さきれぎれの呼吸が君の目を追いかける　木野誠太郎

信号なき都会の路地の渋滞は読点もたぬ息切れに似る　後藤　政基

あでやかなる歓楽の夜に囲まれてそこのみ暗し志賀の湖面は　小林　幹也

音もなく磯船浮かぶ淡青(うすあお)の琥珀織(タ)のごとき海のけだるさ　廣庭由利子

青連院の紅葉は七分　三分ほどしぐるる中に傘もたずゐる　藤井　幸子

ほどけたる舫い綱残し小さき舟月の光の道へ漕ぎ出づ　真砂　晃美

あぢさゐ寺読経のこゑの嫋嫋と青葉の闇をからめとらへる　石橋　妙子

# 私の選んだ秀歌

清水　昭男

しなやかに一行詩あおく描きいつ稲田の上のひとつ蛍は　青田　綾子

プルトップ開けば泡のあふれたるあの夏草のあまやかな白　尾崎まゆみ

うすずみの渦の世に居て引きいだす栄螺の肝のほろりと旨し　桂　保子

「またこんど」の今度が二度と来ないこと知りて若葉が風にざわめく　黒崎由起子

ねえをぢさんと道を尋ね来る少女さうか俺はをぢさんだつた　來田　康男

その話「ほんとにそうなの」「そうらしい」「そうだったのね」「うんそうなんだ」　武内　栄子

ブランコの子の尻を押す母たちもあしたの夢を天に漕ぐべし　中川　昭

音もなく磯船浮かぶ淡青の琥珀織のごとき海のけだるさ　廣庭由利子

みごもれる埴輪の眼の奥ふかく縄文の野火燃えてゐるなり　藤本　則子

綻びを解くは神の手たちまちに一糸を抜きてざんざのさくら　三津野幸代

年刊歌集から「秀歌を取りだすコト」に大いにたじろぎ、たじろぎし、締め切りを過ぎてしまった。歌才のない私には冒険に近い行為だが、「与えられし使命」と信じ、ここにしたためる。「困難を克服することで人は成長できる」と子どもたちに語りかける場が多い。辞めて始まるものはないと揶揄されないように…。誰も皆、縁を得て、生かされている。日常を繰り抜き、言の葉に載せ、表出さる。作者の生きこし、生けるそれぞれは価値を持っていて多様である。その多様な価値を認めながら、世間は成り立っている。勿論、人の世が頂点ではなく、生きとし生けるもの、モノ言わぬ無機質なものにも賛辞を表す。これが選歌する基本である。短歌に込めた言葉の裏・側面を、時間の流れを、時には己と向き合うモノとなり、虫・鳥の眼となり、多次元へと広がる言葉の数々。真剣さが伝わる短歌・感傷に向かう中間に居る短歌、少し間がある楽しい短歌など多様なモノを選ばせて頂いた。便利さ、速さ、安さなどが絶対的価値を持つのではなく、それらと反対にあるモノにも、大いなる価値を持っているのだろう。

## 受贈歌集・歌書（兵庫県内分）

☆『歌画帳　異夢』　砂原唯男
2011年　風のアトリエ刊

黄の蝶がきたりて光を置きてゆく春となりたる我が家の庭に

☆『人間賛歌　新谷英子の世界』
2016年3月　故新谷英子

彷徨のおもいの旅の尽くるなく綾に織り込むわれエトランゼ

☆『年刊歌集』第39集
11月　西宮歌人協会

叔父戦死の年に生まれし妹と靖国神社へ七十余年経て　船橋貞子

☆『どるふいん』合同歌集第18号
12月　どるふいん短歌同好会

八甲田の橅の樹海のきのこ狩り何かがおいでをしているような　前田桂子

☆年刊歌集『放水路』第四十二輯
12月　東浦短歌会

いつもゆく散歩コースの介護施設ひとつの部屋の灯り気になる

☆短歌作品集『猪名川』　17号
2017年3月　足立晶子短歌教室

「産まれたよ」息子のメール届きたり秋の光のあふれるこの日　松下千津美

☆『白光名城』
4月　柊書房

暑かりし夏の終はりの糠床に機嫌直しのビールを飲ます　斎藤郁代

☆『WAR IS OVER!百首』南　輝子
5月　ながらみ書房

歳月やジャワ・ジャカルタの虐殺をひとに語りてさらにへだたる　来田　務

---

## 平成29年度ふれあいの祭典
# 兵庫短歌祭

**主　催**　兵庫短歌祭淡路市実行委員会・兵庫県・淡路市・（公財）兵庫県芸術文化協会・兵庫県歌人クラブ

**後　援**　兵庫県議会・兵庫県教育委員会・淡路市教育委員会・神戸新聞社

### 作品募集案内

**作　品**　未発表作品1人1首

**締　切**　平成２９年8月21日（月）当日消印有効

**送り先**　〒679-2151　姫路市香寺町香呂438　生田よしえ方
ふれあいの祭典兵庫短歌祭宛
℡ 079-232-4003

**応募料**　1,000円（切手不可）※応募者に作品集無料送付

**応募方法**　応募用紙またはＡ４の原稿用紙に郵便番号、住所、氏名（ふりがな）、電話番号、作品1首を明記し、応募料を添えて郵送してください。

**選　者**　阿木津英・塚本青史・兵庫県芸術文化協会・淡路市、兵庫県歌人クラブ顧問・幹事

**賞**　文部科学大臣賞、兵庫県知事賞、兵庫県議会議長賞、兵庫県教育委員会賞、淡路市長賞、淡路市議会議長賞、淡路市教育長賞、ふれあいの祭典兵庫短歌祭淡路市実行委員会賞、神戸新聞社賞、兵庫県歌人クラブ賞ほか多数。

### 短歌祭のご案内　◇入場無料◇

**日　時**　平成29年11月18日（土）午後1時から午後4時半

**会　場**　淡路市サンシャインホール
淡路市浦１４８－１　℡ 0799-74-0250
・東浦バスターミナル下車すぐ（三宮から直通バスあり）
・車　神戸淡路鳴門自動車道「東浦インター」すぐ

**内　容**　入賞作品表彰と講評等。
オープニング　「恵比須舞」岩屋恵比須舞保存会
催し　講演　影山尚之氏（武庫川女子大学文学部教授）
演題　「淡路島和歌の路」

## 地区通信

**【阪神】**2月5日、園田学園女子大にて第14回契沖顕彰短歌大会開催。▼4月5日、インターネットサイマルラジオでヤママユ前登志夫没後9年、第7回偲ぶ会制作ラジオ番組が放送される。▼5月6日、川西市アステ市民プラザマルチスペースにて「心の花」兵庫歌会の10周年記念歌会開催。講師は佐佐木幸綱氏。出席者は足立晶子、植山俊宏、武富純一、來田康男、佐藤博之各氏他多数。

（吉野節子）

**【神戸】**11月12日、神戸市産業振興センターにて海市本社集会開催。中川昭、明石多美子、橋本博文各氏ら16名出席。▼平成29年1月7日、花の北市民広場にて文学圏新年歌会開催、出席者15名。▼1月18日、神戸ポートピアホテルにおいて神戸芸術文化会議新年会開催、黒崎由起子氏出席。▼1月30日、尼崎ホップインホテルにおいて花鏡新年歌会開催、出席者30名。▼2月1日、東京根岸会館において日本短歌雑誌連盟理事会開催、三津野幸代氏出席。▼2月4日、滋賀ビルにおいて潮音関西新年歌会開催、出席者32名。▼2月13日、文学圏運営委員会において代表・下村千里、発行人・浮田伸子、編集人・青田綾子各氏が再任された。▼4月6～11日、神戸さんちかホールにおいて神戸開港150年記念事業「神戸百人の色紙展」開催、安藤直彦、尾崎まゆみ、黒崎由起子、中川昭各氏が出展。

（黒崎由起子）

**【明石】**11月23日、明石市生涯学習センターにて第43回明石市文芸祭表彰式を開催、短歌一般部門の応募総数317首、選者楠田立身氏。市長賞濱口宏子氏。議長賞内海永子氏。ジュニア部門の応募総数2458首。選者田岡弘子氏。式後、選者の講評。▼11月24日、明石市柿本神社にて第157回柿本神社秋季献詠祭を開催。選者楠田立身氏。兼題「菊」競点題「笑」。出詠祭典参列伊藤敦子氏。▼「明石大門短歌会」は2月4日、第410回を迎え、主宰野瀬昭二氏の卒寿を祝う歌会をもつ。伊藤敦子、杉森圭子、宮道博、森嶋郁子各氏参加。▼明石ペンクラブは「新明石大門」(作品発表誌)発行に向けて取り組む。4月22日「明石ペンクラブ通信」第9号を発行。▼「六甲」の鈴木美樹氏は平成28年度神戸短歌祭にて新人賞受賞。奨励賞受賞の鈴木裕子氏は鈴木美樹氏の母。母娘そろっての入賞。両氏は方代の里なかみち短歌大会、城崎短歌コンクール、神戸新聞にもそろって特選・入選となる。

（伊藤敦子）

**【姫路】**11月23日、姫路市民会館にて姫路歌人クラブ合同歌会開催。出詠105首。小畑庸子、神保原廣己、小松カヅ子、水野美子、久米川孝子各氏他65名出席。▼3月19日姫路市民会館にて大松達知氏を迎えコスモス姫路支部歌会開催。水野美子。藤岡成子各氏他39名出席。

（飯田　進）

**【東播】**2月17～19日、稲美町ふれあい交流館にて、サークル発表会を開催。茅花短歌会は会員全員の短冊を展示。▼3月8日、茅花短歌会は茅花誌第183号を発刊。▼東加古川短歌会は、毎月第2金曜日午後1時より加古川総合文化センターにて月例短歌会を開催。水野美子氏他参加者10名。

（前田昭子）

**【中播】**1月30日、市川町文化センター・コミュニティーセンターにて市川町新春短歌会開催。青田綾子、原島泰、田中典子各氏入選。選歌と講評小畑庸子氏。▼2月12日、神河町神崎公民館にて第11回神河町文芸祭開催。神保原廣己氏入賞。佐想京子氏入選。選歌と講評小畑庸子氏。▼5月16日、小畑庸子氏(水甕)は藍綬褒章を法務省にて受賞。その後宮中にて拝謁。慶祝。

（生田よしえ）

**【北播】**9月29日、北播短歌連盟会長藤原孝雄氏逝去。同氏

## 追悼

### ダンディズム　上田一成さん

二〇一七（平29）年一月十一日、上田一成氏は享年八十歳の生涯を閉じた。

柩の窓に覗く白皙の恩顔は呼びかけてもついに応えることはなかった。

二〇一五年九月二十七日、たなかみち氏の『具体』出版記念会でお会いしたのが最後で、装真をまとう身の痛々しさを泣き悲しんでおられた。

一九三八（昭13）年、家島町坊勢に生まれた氏は宮柊二に見出され、醍醐志万子を師として「ポトナム」に拠り、自ら「ゑちうど」を主宰して地域歌壇の発展に努めた。もとより長く兵庫県歌人クラブ幹事として後進の指導にあたったことはいうまでもない。

・折り紙を内へ内へと子の折りて鶴のくちばし動かぬつばさ

第一歌集『折損理由』

・神様は死なないのかとわれに問う幼の目を見て死なぬと答う

年刊歌集56

上田短歌のリアリズムの根底にある優しさの歌として忘れ難い。優しさとはダンディズムで、生涯に残した三冊の歌集の一方の側面である。

兵庫県歌人クラブ新人賞、姫路市芸術文化年度賞、県歌人クラブ功労賞など数々の足跡を積み、県歌壇発展のためにご尽力いただけると思っていただけに、そのご逝去が惜しまれてなれない。ご冥福を祈るばかりである。

（中川　昭）

逝去により同会の継続が困難となり短歌大会も59回を以って中止。後日の幹事会にて解散する事に決定。▼10月30日、西脇市総合市民センターにて第60回西脇市短歌大会開催。応募数一般の部152首、学生の部460首。選者一般の部安藤直彦氏。学生の部西脇短歌会。一般の部特選一席上月節子氏(加東市)、学生の部特選田中遥菜さん(加東市立東条中3年)他2名。出席者25名。▼11月13日、アスティア加西にて第50回加西市文化祭文芸祭開催。短歌一般の部応募数213首、選者春日いづみ氏。市長賞垣内啓子氏(加西市)、ジュニアの部大谷幸輝さん(泉小2年)。出席者加西市教育長高橋晴彦氏他35名。▼4月29日、西脇市高松町長明寺内宝光院にて第38回源頼政公奉賛短歌大会開催。応募数84首。選考は北播各地区幹事13名。講師は三村時枝氏。特選第一席は今川司氏(加東市)。

(芝本政宣、松尾鹿次)

【西播】1月10日、赤穂市文化の集い、赤穂短歌の会より5名参加。▼2月8日西播磨短歌祭部会開催。尼子勝義、内海永子、飯田進各氏参加。28年度の評価と29年度の短歌祭について協議。▼2月22日、西播磨ふるさと文化芸術振興事業実行委員会に尼子勝義氏が短歌祭担当者として出席。▼3月18日、南光文化センターにて、佐用春季短歌大会開催。春季大会賞尾上節子(風の日に一両電車に舞い込んだ紅い紅葉も一人旅です)安藤直彦、船引貴明、菅原艶子、新家イサ子、衣笠邦恵各氏他25名参加。▼3月30日、短歌俳句合同誌『佐用文化』157号刊行。▼5月3日、赤穂市文化会館にて第33回花梨忌歌会を開催。

(尼子勝義、安藤直彦)

【但馬】2月13日、新温泉町「前田純孝賞」学生短歌コンクールの入賞者発表。応募作品、大学生808首、中高生614 8首。選者佐佐木幸綱氏。▼2月1日、「第3回朝来市文学のつどい作品集」発行。一般の部、応募88首。選者安藤直彦氏。▼3月、但馬文教府、「第41集たじま作品集」発行。投稿者、41人。▼3月25日、浜坂先人記念館にて「前田純孝賞学生短歌コンクール・入賞者による手書き作品展」開催。5月3日まで。▼4月23日、朝来市大蔵市民会館にて「じろはったんの里」短歌会開催。▼4月24日、豊岡市豊岡市民会館にて、「但丹歌人会」主催「春の大会」開催。

(足立勝歳)

【淡路】12月25日、ちどり短歌会は年刊歌集『ちどり28年版』刊行。一人10首17名の会員参加。ちどり短歌会代表山田恵子(はにかんだ笑顔を遺影に選びたり昔に死んだ恋人のように)▼3月30日『淡路歌人クラブ年刊歌集第4集』28年版刊行。一人10首45人参加。代表清水昭男(をちこちに現れるらし妖怪に遊ばれてをり人類危ふし)全淡短歌祭入賞作12点、ジュニア2点掲載。

(来田　務)

## 「第8回歌集批評会記」

三津野幸代

平成28年12月17日(於)兵庫勤労市民センター

当歌人クラブの新たな活動の一環として始まった歌集批評会は今回で八回目を迎えた。参加者48名、満席で催しは定着したと言えよう。今回は廣庭由利子歌集『ぬるく匂へる』と玉川裕子歌文集『赤いレトロな焙煎機』が取り上げられ、レポーターは中川昭氏と小黒世茂氏、司会は小林幹也氏が担当。先ず廣庭歌集への中川氏評。ボキャブラリー豊かな作品群、失われた言葉を希求し、漢語和語を駆使して、上手くマッチさせる言葉紡ぎに工夫がある。柔軟且つ繊細な歌いぶり、健やかにして粘りがある。相聞の艶も捨て難くまだまだ変身出来る人、次作を期待している。

・真振出の袂となりて軟風に
　花と熔けゆく夕べの雲は

・しあはせか不幸か知らぬま
　まを生く沈水香の腐敗うる
　はし

次に玉川歌文集への小黒氏の評。歌と文をドッキングさせた珍しいスタイルで、旅行詠ながら数々の発見があり洒落た小エッセイとして素晴らしい。コーヒーの魅力を聴覚味覚臭覚へと訴えた異色の歌集として楽しんで鑑賞出来る。

・一瞬の青い炎よ燃えあがれ
　カフェ・ロワイヤルわたく
　しのため

・空き瓶が冬のひかりに濡れ
　ている職を持たないわたし
　のように

会場からも活発な意見が出て活気に満ち、盛り上がった。最後に作者二人から感謝と今後の歌への抱負が述べられ、「大変充実していて喜ばしい」との代表の言葉で締め括られた。

## 創立60周年記念事業 基金のご協力 ありがとうございました

兵庫県歌人クラブ

青田綾子、秋本多恵、朝山美津子、尼子勝義、有井日出子、安藤直彦、飯田進、生田よしえ、池本俊六、池本登代子、石田フサ子、石飛俊郎、石橋妙子、石原智秋、伊藤敦子、伊藤佐重子、岩田美代子、故上田一成、浮田伸子、兎田孝子、内井幸子、遠藤瑛子、大江美典、太田冨美恵、小畑庸子、蔭山美代子、桂保子、兼貞靖行、上條とみ子、甘田千春、岸野和夫、岸本しげこ、久米川孝子、黒崎由起子、香下艶子、後藤くみ子、小松カヅ子、來田康男、澤田尚夫、志方弘子、志田栄、芝淵田鶴子、嶋澤隆、清水昭男、菅原艶子、杉本こま子、砂原唯男、帯刀清彦、田岡弘子、高井忠明、鷹野春美、高嶺神戸支部、武内栄子、たなかみち、玉川裕子、千鳥短歌会山田恵子、土居正、中川昭、中島眞喜子、中島千進、中道君子、西田弘子、西村節子、西村紀子、野瀬昭二、廣庭由利子、福島妙子、藤井幸子、藤井真理子、藤岡成子、藤本則子、藤原好子、藤原町子、船橋貞子、船引貴明、星野敏江、ポトナム姫路支部、本田勝彦、前田昭子、牧野秀子、真砂晃美、増井定子、増井都美子、松田辰子、三木雅子、水甕姫路支社、水谷英子、水野美子、三津野幸代、南輝子、南裕之、森嶋郁子、楊井佳代子、保田ひで、矢内温代、矢野一代、山田文、山中洋子、弓岡あき子、吉田千代美、吉野節子、米子香珠子、林間阪神芝淵田鶴子

## 水甕姫路

隔月刊「ひめぢ水甕」

編　集
生田よしえ　小松カヅ子
藤本　則子　楊井佳代子

発　行
小畑　庸子
〒679－2131　姫路市香寺町犬飼366
☎079－232－2380

会　計　安田　玲子
〒679－2132　姫路市香寺町須加院338-347
☎079－264－4664

---

郷土に生まれ、郷土が育てた短歌誌

## 文　学　圏　創刊昭和21年

代　　表　下村　千里
編　集　人　青田　綾子
発　行　人　浮田　伸子
発　行　所　〒651－2276
神戸市西区春日台1-8-1　浮田方
☎(078)961-5676
編集委員　内山　嗣隆・岸本　寿代
宮脇　経子・山本　圭子
山本　君子・吉田千代美
会　　計　吉永久美子

---

## 白　圭

編集委員
内海　永子
鎌谷　克子
川上千鶴子
塩澤　文子
首藤　幸子

発行所
〒679-4003　たつの市揖西町小神297-1
内海永子方
白圭社
☎(0791)63-4734

---

## 旅　笛（りょてき）

歌は人生の旅路に携える一管の笛

編　集　角倉　羊子
黒崎由起子
小笠原明子

旅笛の会
〒178-0064　東京都練馬区南大泉2-23-8　梅村方
角倉　羊子
〒651-0052　神戸市中央区中島通1-1-25-102
黒崎由起子

---

## ポトナム姫路支部

（姫路）　西門　和子
（佐用）　新家 イサ子

連絡先
〒671-2247　姫路市緑台1-7-1
羅川　範子

---

## 波濤神戸

発行人　保田ひで
発行所　波濤神戸支部
連絡先　〒653-0852
神戸市長田区山下町1－5－15
保田方
☎(078)612－9294

保田　三好　田渕　富岡　尾末
ひで　寿子　知子　経子　幸子

---

## 林間阪神支社

伊藤佐重子・石黒　陽子
今西シゲ子・内井　幸子
倉橋　愛子・芝淵田鶴子
寺嶋　雅子・平木美智子
南　操子・吉村すゑ子

〒662－0944　西宮市川添町一－一四
芝淵田鶴子方
☎(〇七九八)三六－一九〇七

---

## 美加志保短歌会

創刊　昭和二十一年十一月

〒673－1423　加東市東古瀬七六－一
編集兼発行人　内藤　晴樹
☎(〇七九五)四二－一二二二

---

## 東浦短歌会

代表　片山 田佳子
毎月　第2木曜日　13時30分～
歌会
東浦老人福祉センターにて
会費　月　千　円

連絡先
〒656-2311　淡路市久留麻2346-6
片山 田佳子
☎(0799)74-2141

---

## 玲　瓏

［玲瓏の會］

塚本邦雄詩歌アカデミア迫真的想像力の
飛翔を期するサンボリスムの殿堂

呈送稿要領見本誌
御希望の方は
〒262-0026　千葉市花見川区瑞穂2丁目1－1
ガーデンプラザ新検見川2－906
塚本青史方
Tel/Fax 043-211-6704
http://reir.blue.coocan.jp

---

## 水甕明石支社

左記で、毎月歌会を開いています
お気軽にご参加下さい

◇第一土曜日　午後二時より
◇場　所　神戸医療生活協同組合
生協会館
◇連絡先　池本　俊六

〒651－2233　神戸市西区櫨谷町福谷
六六八－一
☎(〇七八)九九一－〇一五五

---

## 東加古川短歌会

水野　美子

金砺　靖子　郡　英子　小西　春見
佐藤　咲子　新屋　修一　須鎗みち子
谷村　孝子　福山　祥子　水野　美子
矢内　温代

---

## 昭和八年創刊　六　甲

代　表　田岡　弘子
〒673－0845　明石市太寺四－一－三〇
発行人　志方　弘子
顧　問　竹本　美屋子
編集委員　石原　智秋　牧野　秀子
青山　俊代　黒川　明子
村瀬　美雪　阿部　明美
加藤　容子　小島　和子
西村　紀子
会計室　小田　弥生

---

## 水甕芦屋短歌会

歌会（ＰＭ１:30～４:00）
第２土曜日（芦屋市民会館）
第４金曜日（谷崎潤一郎記念館）

・連絡先 〒659-0026 芦屋市西蔵町６-22
☎(0797)31-7220
藤井幸子方
・事務局 〒659-0012 芦屋市朝日ヶ丘町16-34
☎(0797)31-5573
石井佳子方
近くの方の御参加歓迎します

---

## 姫路歌人クラブ

顧　　問　安井　一美　水野　美子
楠田　立身
代　表　小松カヅ子
副代表　内海　永子
会　計　青田　綾子　飯田　進
会計監査　首藤　幸子　新家イサ子

事務局
〒671－2224　姫路市青山西四丁目五－六
西村　久代方
☎(〇七九)二六七－二七六七

## 兵庫県歌人クラブ　年刊歌集第五十七集作品募集案内

**作品**　十首（過去一年間の自作、既発表・未発表問わず）・題を付す

**様式**　四百字詰め原稿用紙（A4判）二枚を用い、楷書で明記・右肩を綴じる
一行目に①題名　②氏名（題名の下に書き、必ず「ふりがな」を付す）
二行目はあけ、三行目から③作品十首　④二枚目末尾に所属結社または団体名・郵便番号・住所・電話番号を明記

**かな遣い**　新・旧いずれかに統一し、歌稿右肩欄外に新・旧の別を明記

**参加料**　三千円（歌稿に同封して送金―切手代用不可）

**資格**　問わない（会員・非会員の別なく誰でも参加できる）

**締切**　平成二十九年八月二十一日（当日消印有効）

**送付先**　〒六五八―〇〇二七　神戸市東灘区青木二―二―一―六一七
三津野幸代方
兵庫県歌人クラブ年刊歌集刊行委員会あて
電話〇七八―四三一―八六六五

## 伝統文化体験フェスティバル

平成29年3月4・5日、兵庫県公館

### 楽しかった短歌の時間　岩尾淳子

講座の講師ということで、三月四日を楽しみにしていました。どんな方が参加されるのか、予想がつきません。

当日は十名ほどの参加者がありほっとしました。まず簡単に自己紹介をしていただきました。すると、ずいぶん勉強をしていらっしゃる方から、小学三年生の男の子までさまざまです。まず、最近の歌集から選んだ口語で詠まれた親しみやすい短歌を紹介しつつ、難しい言葉はいらない、身近な題材で、わかりやすい言葉で作るのがよいという主旨の話をしました。歴史の方はごく簡単に済ませて、次は実作。キーワードとして「天象」にかかわる言葉をひとつ入れるという課題を出しました。するとたちまち手があがります。出来た方から作品を板書し、講評をすすめました。子どもさんの発想の新鮮な歌、年配の方のユーモラスな歌、静謐な時間を織り込んだ歌に感動しました。参加した方と共に添削をしながら笑いも起こり、楽しいひとときでした。

「わかりやすい言葉で」と岩尾氏

### 短歌作成プリント　小林幹也

短歌ブースの前を偶然通りかかった人の足を停めさせ、一首つくってみようかな、という気にさせるにはどうしたらよいか？　そのために私は「短歌作成プリント」をつくってみた。これは私たちが短歌をつくるときに頭のなかでしていることを可視化し、一枚のプリントに落とし込んだものである。つまり、いま一番伝えたい思いをまず書いてもらい、次にその思いから浮んでくる場面を思い浮かべ、いつ、どこで、誰が、何をしていたのかを箇条書きにしてもらう。さらに、それらをもとに、五七五七七のリズムに整え、一首とする。こういう工程が、プリントを右から左へ読みながら穴埋めをしていく形で展開される。具体的な説明と添削は講座内でするとして、短歌ブースの前で歩調を緩めた人に、これを渡せば、自分にもできそうだという気になってもらえるのでは、と考えたのである。結果、当日は大盛況。追加の椅子を入れてもらったほどだった。

「五七五七七のリズムで」と小林氏

**◇余滴◇**　60周年記念号をお届けします。皆さまのご協力を深く感謝しています。60周年関連を黒崎、他は森嶋が担当しました。（黒崎由起子・森嶋郁子）

### 平成２８年度収支決算報告書

自　平成２８年４月１日～至　平成２９年３月３１日

収入の部　（単位　円）

| 費目 | 金額 | 摘要 |
|---|---|---|
| 前年度繰越金 | 1，485，464 | |
| 会費 | 965，000 | ４７３名（ｽﾃｯﾌ＋ﾊﾞｲﾄ） |
| 結社広告費 | 129，000 | ３０００×４３ |
| 歌会広告費 | 51，000 | １０００×５１ |
| 県助成金 | 450，000 | 年刊歌集５６ |
| 県芸術文化協会給付金 | 20，000 | 伝統文化体験フェア |
| ６０周年記念行事 | 223，890 | 余剰金 |
| ふれあいの祭典 | 94，445 | 神戸市より |
| 批評会余剰金 | 54，683 | 6月 25,102　9月 21,138　12月 8,443 |
| 懇親会余剰金 | 19，810 | 4/29　16,800　11/12　3,010（ふれあい） |
| 預金利息 | 29，106 | 定期解約 12/7　28,967 |
| 寄附 | 25，000 | 生田１０　玉川１０　伊藤（佐）５ |
| 寄附 | 6，000 | 他４口 |
| 合計 | 3，553，398 | |

支出の部

| 費目 | 金額 | 摘要 |
|---|---|---|
| 総会　補填 | 310，876 | 会場費他 |
| 兵庫短歌賞（新人賞）補填 | 18，772 | ２８年度 |
| 年刊歌集　補填 | 543，212 | ５６歌集 |
| 会報費 | 640，240 | １９５号、１９６号 |
| 通信費 | 62，214 | 事務連絡・ハガキ・切手 |
| 交際費 | 79，760 | 協賛費，慶弔費 |
| 幹事会費 | 14，340 | 会場費 |
| 事務局費 | 257，244 | 会議室・交通費・渉外他 |
| 消耗品費 | 11，189 | ﾌﾟﾘﾝﾀｰ代・宛名シール |
| ふれあい短歌祭　補填 | 62，000 | ２３名（ｽﾃｯﾌ＋ﾊﾞｲﾄ） |
| 伝統文化体験　補填 | 58，940 | 交通費・出向費・会場準備 |
| 小計 | 2，058，787 | |
| 繰越金 | 1，494，611 | |
| 合計 | 3，553，398 | |

会計　福島　妙

上記の通り相違ありません　　平成２９年３月３１日

監査　兼貞　靖行